

---

# 最強の女と最凶の漢

アザトク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強の女と最凶の漢

### 【Nコード】

N0562Q

### 【作者名】

アザトク

### 【あらすじ】

川神学園にかつて最凶の漢がいた

世界の全てを敵に回した漢が川神の地に戻りなにをするのか

川神超決戦より一年

川神学園に最凶が舞い戻る！

一年前の送別会（前書き）

そこそこ頑張ります

5月19日 台本形式から修正いたしました。

## 一年前の送別会

「ここまでだ、諦めてくれ」

額に大きな？印の傷がある少女が男に告げる

男の眼前に居るのは約数百名の猛者達

「ははは、川神院に風間ファミリーに四天王が総出たあ実に壮観だねえ」

男は笑う

男の敵は世界

男の味方は皆無

男は孤独にして最凶

男は善なる者に在らず

男は悪だ

「いいねえ、最高の送別会だ」

そう、この舞台は送別会

男だけの為の送別会

明日になれば男は居なくなるだろう

「ったく、なんつう顔をしてやがんだ百代」

「いや．．．これでお別れかと思うと」

「ははは！ あの百代がデレやがった！！」

心底嬉しそうに

心底悲しそうに

心底楽しそうに

心底虚しそうに

男は笑う

さて、お喋りはここまでだ。

男は空を見上げる

そこには青空が広がっている。

自分の右手にはトレードマークである水色の玉が埋め込まれている  
ブレスレット

小学生から共に数多の苦難を共にしてきた男の象徴

それを確認し、手を何度か握り目を閉じる。

「三年の間に沢山のことがあった」

一つ一つが鮮明に思い出せる

大切な思い出だ。

「だからこそ俺は決着をつけるんだ」

「小僧、お主」

今度は陣羽織を羽織った老人が話しかけてきた。

「爺さんか……あんたにも世話になったな」

「ふおふおふお、まだ一番の世話がまだじゃよ」

「そうだったな……爺さん、こんな時にあれだが、あの詩の題名なんだが【川神魂】なんてどうだい？」

「うむ、良い名じゃ」

「揚羽、残り数ヶ月だが後は任せた」

「何を言うか、お主は雲じゃろ？　今までと変わらんよ」

「それもそうか、ならば問題はねえな」

もう一度、男は百代の方を見る

「百代、あまり鬪いに拘るなよ。何か大きな趣味でも見つけてみる」

「ああ、見つけてみせますよ」

「なら安心だ」

ゆっくりと目を開けて拳を天に向かって突き上げる。

「さあ、お喋りの時間は終了だ！」

男は詠う

「光灯る街に背を向け、我が歩は果て無き荒野

奇跡も無く標も無く、ただ夜が広がるのみ

揺るぎ無い意志を糧として、闇の旅を進んでいく」

そして大軍へと向けて男は走り出した。

「逝くぜえええええ！」

これが一年前の話である

一年前の送別会（後書き）

感想待ってます

## 主人役設定（前書き）

うまく書けないっす

## 主人役設定

神楽 かぐら  
桐生 きりゅう

所属：川神学園3 - E

年齢：九鬼揚羽と同じ歳

本当は去年に卒業のはずが様々な事情で一年留年することに

英雄や百代が頭をあげられない唯一の男

好きなもの

旅、百代または揚羽の膝枕、昼寝、動物

嫌いなもの

常識、束縛、安眠妨害

苦手なもの

怒った時の揚羽、セクハラしたら反撃してくる揚羽、揚羽Love  
な感じ、・・・あれ、基本的に揚羽苦手なんじゃね？

性格：混沌、善

筋力：S

耐久：EX

敏捷：EX+++

気力：F

運：S

スキル

旅人

世界を駆け抜け、世界のなにもにも縛られない

悪逆非道

そのイタズラは世界を震撼させる

カリスマC(A)

なんだか憎めない奴

指導者 S++

団体、個人を問わずに長所短所を見抜き最高の指示が出来る

## 主人役設定（後書き）

感想とか待ってます

半年間のダイジェスト？（前書き）

文才が欲しい、グダグダになった

## 半年間のダイジェスト？

大和 side

「はあ、最近暇だな」

そう姉さんが唐突に呟いた

「なに言ってるのさ」

今は昼休み、俺達は皆で仲良く教室で弁当を食べていた

「しかし姉さん、今日は俺達と飯なんて珍しいね」

「そうだぜモモ先輩はいつも侍らせてる女の子とイチャついてるのにな」

「なんせクリがいるからな、隙あらば撫で撫でしたいんだ」

「真顔で言わなくても・・・」

「お姉さまは相変わらずね」

「モモ先輩は羨ましいぜ」

珍しくファミリー全員が昼休みに揃っている

まゆっちは黙っているがニュースに集中しているようだ。

『続いてのニュースです。バクチアで様々なことが起きました』

「いい加減なニュースだな」

『約半年前にハグダットで新たな古代遺跡が学生によって発掘されたことがわかりました』

「お、なんか冒険の臭いがするな」

「キャップ以外にも凄い学生がいるんだね」

『発見された遺跡は歴史的価値が非常に高い遺跡で一月もの間、発見した学生を中心に調査が行われました』

「やるわね学生」

『調査終了後、王族からの求婚を受け』

「玉の輿かあ、羨ましいな。俺様もしたいぜ」

『ましたが『俺は王族とかには縛られねえ』と言って一応、勲章だけもらい行方不明になりました』

「断ったのかよ!!」

『学生はその後、海を渡りズイズ銀行でゴリゴ13と名乗る男と共に世界最大級の銀行強盗集団を捕まえたことで所在が判明』

「ああ、あの伝説の」

『しかしまた王族から勲章だけを貰い去ってしまいました』

「なにそれ、格好良すぎだろ」

『翌日、その学生がバクチアでドイツ軍と激しいカーチェイスを繰り広げました』

「一晩で学生の身になにがあった」

『更に翌日、追っていたドイツ軍と共に紛争地域を制圧し現地人の宗教戦争の終止符、和解をさせました』

「だからなにがあったのだ」

『そして英雄と祭り上げられた学生は革命軍を纏めあげて暴君を倒しました』

「学生、凄すぎでしょう!」

「本当に何者なんだYO、学生」

「松風、どうやらVTRが流れるようですよ」

『その学生の正体が先日の演説で判明いたしました、これが問題の映像です』

『俺達は暴君を打ち倒し平和を勝ちとった!』

「「「「「「「「ぶう！！」「」「」「」「」

川神学園の一年生と今年転入生以外の生徒達が吹いたに違いない  
そりゃあ盛大に吹いたさ。

S i d e o u t

俺は停学が解けた為に川神へと戻ってきていた。

新政府のトップは副リーダーへと渡したし俺はまた気ままな学生へと戻った訳だ

一年振りの川神・・・懐かしい

「ふおおおお、久しいのう桐生」

「爺さんも息災のようだなによりだ」

学園長室で俺と爺さんの二人きりで話している

「はあ、一年近くの間停学は中々に楽しめたぜ」

「今や英雄扱いじゃからな」

とにかくだ、俺が帰ってきたのは朝の職員会議で教職員は知ってることだし今は昼休みの途中

「ちよっくら、百代の胸揉んでくる」

「一応、ワシの孫娘なんじゃが？」

「俺の後輩でもある」

そう言っつて学園長室を飛び出す

去年は確か83だったはず（自己調査）一年でどこまで大きくなっ  
たやら

すれ違つ生徒達（二、三年）が俺に気づくや否や道を開ける

そんなことに驚きつつも俺は2・Fの前に着いた

中には大和を弄つて楽しそうにしている百代の後ろ姿

気配を消してソツと迅速に近寄ると

「（ガシツ、モミュモミュモミュ）」

「ひゃあー！」

可愛らしい声で驚く百代、それは大変素晴らしいことだったが俺は

それどころではなかった。

「馬鹿な90だと、一年で7センチも増強したとでも言うのか!？」

高校生にして現在も増えるバストに驚きを隠せない

「くっ、誰だきさひゃあ！」

「そっかあ、百代は俺のこと忘れちゃったのか・・・ショックだぜ」  
だがまだ胸は揉み続ける

しかし反撃されたので止めることにした。

「やあ諸君久しぶり、学園生活は楽しんでるかい？」

『き、きき、桐生先輩!？』

クラスに居た連中が一斉に凄く驚いてくれたので内心、かなり嬉しかった。

半年間のダイジェスト？（後書き）

ご意見ご指摘ございましたらどんどんください、待っています。

二人目の90超え!!? (前書き)

ははは! グダグダだじえい。

二人目の90超え!!!?

大和side

「やつ、若者たちよ久しぶりだな」

『き、きき、桐生先輩!?!』

突然教室に現れて姉さんにセクハラを仕掛けたのは我らが桐生先輩だった。

てかよく姉さんにセクハラできるな。

「くっ、この!」

姉さんが桐生先輩から離れ後ろ廻し蹴りを繰り返すがしゃがんで難なく避けると

「ふむ、黒か・・・もう少し違う色も、いくら年々際どくなって行ってもな(カシヤ)」

パンツ鑑賞に入った、しかも写メを撮った。

「先輩、ようやく復帰ですか?」

「おうそつだ、なかなか停学中は楽しかったぜ」

「いや、あれは楽しみ過ぎでしょ!」

このツッコミも懐かしいな〜

「ははは、なんせ旅人だからな〜（さわさわ、なでなで、もみもみ）」

「尻を撫でて揉まないでください！」

ちよいと泣き目で攻撃している姉さんは貴重だ。

姉さんにセクハラ出来るのはこの人ぐらいだろう、俺達がやったら殺される。

「それで先輩、なんでここに来たんですか？」

「百代の胸の成長具合を確かめに来た」

「それを実行できる先輩が羨ましいぜ」

「と言うか、なんでそんなに堂々と言えるのかしら？」

「あとついでに俺を泊めてくれる場所を探してる」

「むしろそっちのほうが重要なのでは？」

この人はまったく揚羽さんに怒られ・・・待てよ。

俺は今、とてつもないことに気が付いてしまった。

去年までは揚羽さんというストッパーが居たから安心だったがもう

揚羽さんは居ない。

「なんてこった、最悪の展開じゃないか」

軍師大和、今年一番の悩みが出来た2009年の春

side out

むう、誰も駄目だった。

風間ファミリーは明後日から箱根旅行に行くらしく川神院に泊まることはできない・・・ならば

俺が向かった先は2-S組

ガラガラと扉を開けると視線が一斉に集まってきた。

「お、マルギツテじゃないか」

「桐生ですか、一か月ぶりですか？」

がっしりと握手をする。

こいつとはバクチア革命の時に一緒に戦った仲だ、俺の友達

「お前、ドイツ軍はどうしたんだよ？」

「任務です、お嬢様のことを見守ることが最優先だと知りなさい」

中将も親バカだな、うん？　じゃあこの学校に娘さんがいるのか？

「2・Fのクリスお嬢様が中將の娘であることを知りなさい」

俺の考えを察してくれたのか補足してくれた。

「なんださつき行つたから見とけばよかった、それよりも英雄は？」

「それならそろそろ戻つて

」

「ふはははは！ 庶民共よ、昼は楽しんでるか！」

「よう英雄、息災のようだな」

「ぬう、これは桐生殿！ お戻りになられたか！」

「ああ、今日から復帰だ」

「あずみ、桐生殿に茶と菓子を出せ！」

「わかりました英雄様！」

俺は椅子に座らされて茶と菓子を出される。

「桐生殿、すまぬが」

「うん？・・・ああ、お前も用事があるんだろ？ ならそれを済まして来い」

「恩に着ます、あずみ我が戻るまでの間、桐生殿を楽しませておけ  
」！

「わかりました英雄様！」

「うむ、では行って参る」

スタスタと教室を出ていく英雄、姿が見えなくなった瞬間

「桐生さん、久しぶりっすね」

「おうよ、お前も息災のようだなによりだ」

「おい、あのメイドが敬語だぞ」

「うるせえよハゲ！ さつさとパン買って来いってんだ！」

「僕は肩揉む〜」

「ユキはハゲと違って良い子だな〜」

うむうむ、しかしツッコミが少ないこのご時世ではやつも案外重要  
だぜ？

「ユキ、マシユマロ食べるか？」

「食べる〜」

俺はユキに餌付けしているとあずみが話しかけてきた。

「そんでうちのクラスになんの用っすか？」

「クラスじゃなくて英雄に用があつたんだよ」

丁度、クラスに英雄が戻ってきた。

「英雄の帰還だ！！ 拍手で迎える」

「（ぱちぱちぱち）お帰りなさいませ英雄様」

「待たせたな桐生殿」

相変わらず変わり身速いなあずみ

「なに、あずみが面白い話をしていてくれたから退屈ではなかったさ」

「それはなにより、ところで何用かな？」

「お前の家に俺を泊める」

ストレートに簡潔に言った。

「なぜかな？」

「恥ずかしながら説明させてもらつて」

去年までは島津寮に住んでいた俺、しかしその寮の一室も今は他人が住んでいる。

なので家がない、だから泊める。

「あと久しぶりに揚羽にも会いたいしな」

「よかるう、他でもない桐生殿の頼みでもある、それに姉上も喜ぶことだろう」

それから三時間後、俺は九鬼家にいた。

なんでも揚羽はまだ帰ってきてないらしく俺はもうすぐ帰ってくるであろう揚羽を隠れて待っていた。

「今、帰ったぞ」

玄関から女性の声

おお、帰って来たか。

「お帰りなさいませ揚羽様」

統率のとれたお辞儀だ、教育が行き届いているな。

「ふう」

揚羽の溜め息とは珍しい

「お疲れのご様子で」

「うむ、あの狡猾な爺共を相手にするのはやはり疲れる」

そうかそうか、ならば俺がリフレッシュさせてやるう。

音もなく後ろに近づき

「目指せ90超え!」

「きゃあ!」

グワシツつと双丘の胸を掴んだ

なんだか揚羽のこんな声が懐かしいぜ。

「なんだと去年より6センチ増しの94だとぼらあああああああああああああ!」

不覚だぜ、俺としたことが吹っ飛ばされちまった。

「はああはああ、誰じゃ……って桐生ではないか!」

「よう……久しぶりじゃねえか」

とりあえず五メートル吹っ飛ばされた俺をまず心配して欲しかった。

二人目の90超え!!? (後書き)

言うな、俺もわかってるぞ。

さてさて、次回からLOVE川神をお送りしようかなと思っております。

セクハラ野郎のことはあまり気にしないでください、あれが彼の生き方です。

鉄心の策略〜序章〜（前書き）

オラに文才を分けてくれ

っ！

## 鉄心の策略〜序章〜

夢を見た、とても懐かしい夢だ。

「離しやがれ、じじい！」

「駄目じゃ！ 落ち着け！」

目の前には炎、一つの家が炎上している。

「親父！ 御袋！ 出てこいよ！」

今すぐにでも飛び込みたいのにじじいが上から抑え込んできやがって動けない

「糞爺があああああああああああああああ！」

それから数分後、雨が降りだし火が消えていく。

「う、あう」

よろよろと力無く俺は近づいていき膝をついた。

目の前には火傷で瀕死状態の両親だった。

「き・・りゅ、う」

「しっかりしろよ親父！」

「うる、せえよ」

「そう、よ」

「しゃべんな！ 今すぐ助けを」

「お前に、言わなきゃ、いけないことがある」

「鉄心様、申し訳ありませんが、最後まで」

「うむ、任せろ」

「良く聞け桐生、地下のあの部屋に行け」

「そこに私達があなたに託したいものがあります」

「なに遺言みたいなこと言ってるんだよ」

「くくく、自分の死期ぐらいわかるさ」

「ええそうね」

全身大火傷だつてのに元気な二人だ、でもわかる確実に生命エネルギーが薄れている。

「これが最後の言葉になる、ゴハッ！」

「ゴホゴホ！ ちゃんと聞きなさい」

「親父、御袋！」

血反吐を吐く両親を見て俺は一層声を荒げる。

「お前は俺の息子だ、いずれは最凶になってみせる」

「そしてなによりも自由に生きなさい、私達のことなど気にせずに俺の頬をそつと撫でる、温かい両親の手だ。

『愛してるぞ息子よ』

二人は同時にそう言って力尽きた、温かかった手が冷えていく。

「くそつたれがあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああ！」

俺は叫ぶ、雨に打たれながら俺の頬には涙が流れ落ちて行った。

「ん、随分と懐かしい夢を見たな」

目を覚ますと天井があった、あの頃の俺は荒んでいた。

あれが人生で初めての戦いで、人生でたった一度だけの敗北

復讐の炎は未だ燻ってはいない。

「夢とはなんのことだ？」

「それは昔のことに

ってうおい！」

隣には全裸の揚羽が添い寝していた。

冷や汗が流れ落ちる、それはもう滝のように。

やったのか？ 気づけば俺も卒業生なのか？

初めては覚えておきたかった・・・まあ、初めてでもないんだが。

そうじゃなくて。

「全裸で寝る癖は治ってなかったのか？ なんで俺の布団に入ってきてやがる」

「仕方なかるう、これは昔からの癖じゃ。それにここは我の布団じゃ、桐生が寝ぼけて入ってきたのじゃ」

なんと、犯人は俺だったらしい。





「家に泊める」

「いきなり何を言っておるんじゃ？」

俺は事情を説明した。

「泊めても良いがしかし一つ条件があるぞ」

くっ、足元見やがってこの爺さん

「なぐに、簡単なことじゃよ。百代達が帰ってくるまでの間だけでよいから門下生の面倒を見てやってくれんかの？」

「別にそれぐらいなら構わねえが俺は川神流なんて教えられねえぞ？」

それでも良いらしく俺は快く引き受けた。

まさかこれが爺さんの策略だとはまだ知る由もなかった。

鉄心の策略〜序章〜(後書き)

今回はお休みです

## ワシ子の夢（前書き）

皆様の意見を取り入れて書いてみました…むずい。

## ワソ子の夢

川神院

そこは【武】の総本山とも呼ばれている場所

【武神】川神鉄心が率いる最強の流派

そんな川神院の道場に俺は居た。

「蠍打ち100本、始め！」

俺の号令で修行僧が一斉に開始する。

三宿九飯の礼だしこれぐらいはやって当然

ルー先生や爺さん、師範代クラスの人間さえくれば百人組手が行われる。

それまでの間だけで良いから修行僧を見てれば良い。

「じー」 x 2

修行僧達の向こう側：つまり俺の正面、道場の入り口からこちらをこっそりと凝視してくる姉妹が居た。

勘弁してくれよ。

百代のあの目は獲物を見つけた肉食動物のそれだ。

そんな純粹で危険な視線をするなよ。

一方でワン子は……

「……………」

おや？ なにやら深刻そうな瞳だ、顔は嬉々としているのに瞳の奥には感情が複雑に絡まっている感じだ。

これは話を聞いてみるか。

「全員やめ！ 百代と百人組手をしろ！！」

「なっ、先輩！」

百代は次期師範なんだ、押し付けた形になるがこれぐらいはやってもらわねば。

それになにより百代の相手なんて面倒臭いし。

俺は驚いている百代の隣を抜けてワン子を無理矢理連行する。

ワン子 s i d e

私には夢がある。

川神院の師範代になってお姉様を支えること

でも実はそれは本当の夢じゃない

風間ファミリーの皆にすら言っていない本当の夢

私は桐生さんに引き摺られながら裏庭に着いた。

「ここなら誰も居ないだろ」

そう言つて私を縁側に座らせて桐生さんも隣に座つて、いつの間にか用意したお茶を啜り始めた。

私もそれに習つてお茶を啜る。

「……………」

「……………」

互いに無言、お茶を啜る音だけが聴こえる。

今は夕暮れ、茜色の空がとても綺麗だ。

私は覚悟を決めて口を開く。

「桐生さん」

「なんだよ？」

いつも通りの素っ気ない返事

「少し語って良い？」

「おう、語れ」

これから語るのは私の本当の夢

自分の無力さに嘆き、絶望し、挫折を知らないお姉様やおじいちゃんには絶対に理解できない私の夢

それをこの人に語りたい

Side out

何を語りたいか知らないがワン子がこんな顔をするんだ、真剣に聞いてやるう。

「桐生さんは私の夢が何か知ってる？」

「ああ、川神院の師範代だろ」

その為に誰よりも努力しているのも知ってる。

「そうなんだけど…本当は違っの」

「……そうか」

俺はそれを聞いても大して驚きはしなかった、何となくはそんな感じがしていたし

「でも私が中二ぐらいの時に挫折しちゃったんだけどね」

ワン子が挫折？ 信じられないな。

いつも挫けず前に進み続けるのがワン子だろうが。

「私の夢は川神鉄心と川神百代を超えること」

「はっ？」

今度は流石に驚きを隠せなかった。

武神の二人を超えるなんてまた気が遠くなる話だねえ。

「でも努力すればする程にあの二人が遠くに居るのがわかつちゃうの」

泣き出しそうな声で語るワン子

自分の無力さが悔しいのだ

才能が無いのが憎らしいのだ

それに嘆くしかない自分が恥ずかしいのだ

きっと百代と爺さんはこのワン子の話を聞けばワン子を慰めるだろう、そんなのは戯言だ。

ルー先生ならば何も言えない、それは正解だ。

前者の二人は敗北の悔しさは知っていても挫折を知らない。

後者は敗北の苦渋に耐え、挫折の一片を味わった人間

それでも甘い、ルー先生はまだ希望があった。

あの人は才能もあり努力もたゆまない秀才だ。

だけどな

「聞いちゃったのよ、おじいちゃんとお姉様とルー師範代の会話を」

「なんて？」

「『一子には武術は向いてないから普通の道を歩ませるべきではないか？』 『一子は師範代になれないだろう』 『根本的に師範代になれる人物とは違う』 って」

最悪だ、只でさえ絶望しかけていたワン子に止めを刺しに行きやがる会話だ。

「それから会話が続いてね、私が武術を続けられる条件が提示されたの」

「条件？」

「ええ、『高校を卒業するまでに武術での試合で一度も負けない』それが条件」

「……………真剣かよ」

ワン子にとっては屈辱どころではない裏切りにも等しい会話だ。

自分の支えでもあった三人が揃ってそんな会話をしていたんだ、三人は多分ワン子の為を思っていたんだとは思うが三人の会話はワン子を下に見ていることに変わり無い。

もちろん武では圧倒的に格下だがその会話は川神一子という人物を下に見ているからできる話なんだよ。

本当の挫折を知らないから下に見える。

くくく、爺さん

あんたの狙いは分かった。

大方、百代に俺をぶつけて百代の戦闘への気を散らすのと同時にワン子に俺と闘わせて武の道から遠ざけるつもりだったんだろ？

中々どうして酷いじゃないか。

「だから私はもう敗けられないの、どんな相手が来ようとも」

俯いていた顔を上げて俺を真っ直ぐに見詰めてくる。

決意が籠った瞳だ。

暫く考えた後、俺は喋りだした。

「最初に言おう、ワン子には師範代クラスまで行ける才能がない」

「……………」

「努力も実力も経験も才能も全てがお前に感じらない」

「……………」

ワソ子は俺の言葉には動じずじつと俺の言葉に耳を傾けている。

「だがそんな物等は所詮が先の敗北者どもの戯言だ」

「戯言？」

「確かに先に述べた物は存在するのは事実、努力では天才達の領域には普通は辿り着けない」

「だが中には凡夫にも関わらず天才達の領域に辿り着き超えて行った者も数居る、それは何故か?!」

これは俺もそのうちの一人だからこそ語れる真理の一つである

「それは運だ」

「運？」

不思議そうな表情を浮かべるワソ子

「そつだ。超一流の指導者に適した環境さえあればどんな無能でも育つ、肝心なのはそれに出会えるための運だ」

俺はワンス子の両肩を掴んみ

「手前えの覚悟は伝わった！ おめでとう、お前は運がある人間だ  
！！」

あいつらが見下してるなら俺が鍛えてやるよ。

俺とワンス子だけしか知らない契約

見てろよ川神院

ワンス子を化かしてやるよ

## ワシ子の夢（後書き）

もっと沢山のご指導お待ちしております

初めての出会い(前書き)

内容？

いつも通りグダグダさ!!

ごめんなさい

## 初めての出会い

あの夕暮れの契約から一週間、俺はワン子の修行を行っていた。

この修行は他の誰にも知られてはいけない、それだと意味がないからだ。

だから夜が稽古の時間

ワン子には朝の走り込みを変わずさしているが日常生活で行っていたトレーニングは俺が決めた通りにやってもらっている。

まだ4日だがワン子はそれなりに成長した、本来なら時間をかけてじっくりと育てたいのだが『卒業までに武での決闘で一度も敗けてはならない』のだ。

早急に成長してもらわねばならない。

短期で実力をつける為には方法は大まかに二つある。

一つは常識では考えられないハチャメチャな修行

しかしこれは本人と合わなければ成功するかわからない賭けである。

もう一つは至極簡単

実力が自分と同じくらいか少し上の相手と闘えばいい。

だから俺はこの二つの修行をやっている。

相手は俺、実力をワン子と拮抗するように設定して闘う。

互いの実力が拮抗している時に起こるミックスアップという現象を意図的に起こす。

試合中に実力が上がっていき、そして一度試合が終わるとワン子には基礎固めであるハチャメチャな修行をしてもらう。

これで実力を定着させる。

今のワン子の実力はクリスマス嬢よりも若干上にある。

明らかなオーバーワークだが甘いことは言ってもらえない。

「よし止め、五分休んだらまた実戦だ」

「はいっ！」

語りSide

「という訳で桐生先輩をファミリーに誘おうと思っ！」

「賛成だ（よ）」

「いや、落ち着こうよ二人とも」

キャップの意味がわからない突然の提案に二つ返事の川神姉妹に即ツッコミを入れるモロ

「なんだよ、モロは反対なのか？」

「反対じゃないけど十人は多すぎなんじゃない？」

「俺様は大丈夫だと思うぜ、なあ皆」

頷くファミリー

「じゃあ決まりだな」

「いや、少し待って欲しい」

ストップを掛けたのはクリス

「見たところ皆は桐生殿を知っているようだが自分とまゆっちは桐生殿について知らないのだが……」

クリスとまゆっちは興味深気にしている。

大和は「そうだったな」と言い全員を一度見渡すと遠い目をした。

「そうだったな、じゃあ少し昔話をするか」

あれは俺等がまだ中学生の話した

S i d e o u t

四年前、俺達ファミリーが全員まだ中学生だった頃

当時、姉さんは高校受験の事でストレスが溜まっていてよく川神市の不良を狩っていたんだ。

でもその時からルー先生よりも強かった姉さんに其処らの不良が足下にも及ぶ訳がなく姉さんの戦闘への欲求も積もるばかり

俺達も川神院の師範達も姉さんの扱いに困っていたある時、学園長が川神院の前に道場破り大歓迎とかなんとかの立て札を設置してなんと姉さんを倒したら学園長に挑戦する権利と賞金が出るなんてやった

しかし川神院に道場破りに来る物好きもいずに半月程経過したとある日曜日

「じじい、私は闘いたいぞ」

「ワシだって相手ぐらい探しておる。候補としては九鬼揚羽辺りが引っかけりそうなんじゃよ」

「揚羽さんか！ いいな、早く闘いたい」

凜猛な猛禽類の様な笑みを浮かべる

鉄心はそんな百代を見て溜め息を吐いた

「百代よ、闘いよりも行く高校は決めたのか？」

「私は高校なんて行かずに川神院を継ぐ」

その言葉にまた溜め息を吐く

「じゃがな百代、せめて高校ぐらいは卒gY」たのもー」

暢気な声でやって来たのは川神学園の制服を着た一人の男だった。

「なんじゃお主は？」

一月程前に川神大戦が行われたせいで川神学園の生徒のほとんどは休んでいたはず・・・しかし学長である自分はこんな男は覚えがない。

「表にある立て札見てやってきた」

まさか本当に来るとは思ってもみなかったが鉄心はチラリと横目で百代を見た。

「……………はあ」

待ちに待った道場破りが高校生であまり手練れではなさそうなので拍子抜けしてしまっているようだ。

「まあ、一応は道場破りに来たんじゃない。百代相手してやりなさい」

「……………ああ」

澁々ながらも頷く百代

「誰か猛者は来てくれんかの？」

鉄心の呟きは直ぐに叶うことになった。

「西方、神楽桐生！」

「うっい」

「東方、川神百代！」

「ああ」

「始め！」

開始が告げられた瞬間、百代の顔に桐生の力任せの拳がめり込んだ。

そしてそのまま吹き飛び、床を二回ほど転がって壁に叩きつけられた。

「うし。俺の勝ちだ」「まだだ!」「おろ?」

百代は勢いよく立ち上がり構え直す。

しかし顔には困惑を隠せずにいる。

「いくぞ」

百代が短く言い己が出せる全速力で突撃する。

これで終わると道場に居た全ての人間が思ったが

トガンッ!

地面に顔を叩きつけられていた、そのまま五回は叩きつけられ床は陥没しやっとの思いで脱出した百代の顔からは鼻血が垂れていた。

追い討ちをかけるように左のハイキックを喰い二度吹き飛んだ。

それから三十分後、百代以外の風間ファミリーが川神院にやってきた。

土手で野球をしていたのだが百代に連絡がいつまでもとれずにいたので仕方なくやってきたのだ。

そして信じられない光景を見た。

膝まずいている百代にサッカーボールキックを喰わし髪を掴まれ膝を顔面に喰い押し倒され、マウンドをとりタコ殴り

しかし百代は瞬間回復で疲労も傷も回復してしまう、つまりは絶対に倒れないサンドバッグなのだ。

「うし、そろそろ飽きたし決めるか」

その絶対に倒れないサンドバッグを倒す方法は一応幾つかある。

その一つがこれである

男は百代を無理矢理立たせて後頭部に廻し蹴りを放つ

「がはっ」

そう、傷が回復してしまうのなら気絶させてしまえばいい。

「そこまで」

心無しか鉄心の声が振るえていた。

男と鉄心は少しだけ話し、門下生が何かを持ってきた。

男は道場の出口に歩みながら袋の中に入っていた物を確認し

「きょうの夜は、Y A ・ K I ・ N I ・ K U だ」

上機嫌に出ていった。

これから約二時間後、百代が目覚めた。

百代 side

「ほほほ、目覚めたかの」

「じじい、ここは？」

「医務室じゃ」

朦朧とする意識が段々と覚醒する。

確かあの川神学園の生徒と闘っててそれで

「……………じじい」

「なんじゃ？」

「……………世界は広いな」

今まで私の相手が出来た奴なんて居なかった、それこそ世界レベルで

それがどうだろうか？

地元私を一方的に倒せる存在がいるのだ。

「まだまだ野にもまだ見ぬ強豪がいるんだな」

所詮は私も井の中の蛙だったってことか

私も大海を知りたいな

「じじい、私は川神学園に行くことを決めた」

「ほほほ、あの男に惚れたかの？」

「ああ、ベタ惚れだ」

いつか超えてみせるからな。

「それが私との初めての出会いだ」

どこか惚けたように遠くを見つめる百代

「あの人は私の憧れであり目標でもある」

惚けたような表情だがその瞳には強い意志が込められている。

新メンバーである二人はポカンとするばかりであった。

「それからしばらく俺様達も苦労させられたんだぜ」

「モモ先輩は川神学園に武術での推薦が決まって、休みの日は街を、平日は毎日変態大橋で桐生先輩を待つて勝負しかけて」

「で、姉さんが毎回倒されて」

「セクハラを受けてたんだよね」

「私は師匠から大和への迫り方を色々と学んだよ」

「あの人が原因だったのか!！」

さりげなく驚愕（大和にとって）が判明した。

正確には桐生に迫る百代を見て学んだのだ。

「川神魂を作ったのも桐生さんなんだから!！」

と、自慢気に胸を張るワン子

「凄い人なんですな神楽先輩って」

「だけどワン子が誇る必要はないんじゃないかね?」

と松風

「そんなことないわ、私は桐生さんの舎弟だもの!！」

秘密基地の中に静寂が広がる、ワン子とクリスと由紀江は「?」と頭を傾げる。

そして

「「「「「な、なんだってええええええ!」「」「」「」」

叫んだ。

初めての出会い（後書き）

次回こそlove川神をやってやる！

## ヒゲとウメの接近（前書き）

今回から百代とウメ先生のキャラが崩壊していくかも……

## ヒゲとウメの接近

「どどど、どついうことだワン子!？」

ワン子の言葉に一番動揺したのは姉さんだった。

「? 私が前に『舎弟にして』って頼んだら『いいよ』．．．あれ、でもそうになると舎”弟”でいいのか?』って許されたわ」

姉さんはorzのポーズで落ち込んだ。

「しかしあの桐生先輩がね〜」

過去に何人もの人が頼んでも断られていたのに…

「う、嘘だ」

よろよろと力無く立ち上がる姉さん

「私ですら断られたんだぞ! ワン子だけズルい!！」

ああ、嫉妬してるのか……………

姉さんの桐生先輩への憧れは凄まじい。

具体的には京が俺に寄せる想いぐらい凄まじい。

また過去の話しになるが桐生先輩が姉さんを倒してから二週間ぐらいして、俺等は川神院にお邪魔になっていた。

それでキャップが『ピZZァーロのピZZァが食べたい』って言い出して仕方なく頼んだ

学長もルー先生もやってきて二人分まで頼むことに

まあそこはどうしても良いのだが…

とにかく頼んだ。

後は皆の予想通り

ピZZァーロでバイトしていた桐生先輩が届けにきて一同騒然  
姉さん大慌て

気にせずに桐生先輩はピZZァの代金を貰う

姉さん勇気を出して桐生先輩の携帯番号とメールアドレス

歓喜のあまり近所の不良を殲滅

翌日、桐生先輩がバイトを止め次のバイトを見つける

同時に姉さんが桐生先輩に連絡

二人揃って同じバイト先へ

桐生先輩がバイト先を変える度に姉さんも同じ場所へ  
それこそ忠犬の如く桐生先輩についていく

自宅にもついて行き半ばストーカーしていたのだ。

俺等もなんだかんだで世話になっておりファミリー内ではゲンさんと同じく準メンバーの様な扱い

「ちなみに舎弟になったのは二年前からよ」

全然、気がつかなかった。

だからワン子はよく可愛がられてたのか。

「そうだ、二人とも桐生先輩の人格を示す言葉があるよ」

モロが思い出したかのように喋りだす。

「正に先輩の為にある言葉だよね、くくく」  
なにが面白いんだ京

しかし桐生先輩を示す言葉か、確かにあれしかないよな。

「そ、それは一体？」

まゆつちが恐る恐る聞いてくる

「自由な獣」「自由な獣」

キャップ並みの自由人で

やりたいことはなんでもやる。

それこそ獣のように

「あ、あとは『稀代の大悪党』とも一部では呼ばれてるな」

「大悪党だと!?!」

岳人の言葉に反応したのはクリスだった。

「そんな奴を仲間に入れる訳には――」

「クリス、落ち着けよ」

興奮しぎみのクリスを岳人が宥める

「そうだぜクリス、それにあの人が悪人って呼ばれてるのには理由があるんだ」

「理由?」

「ああ、あの人は悪戯が大好きでな。よく悪戯をするんだが困ったことにくだらなない悪戯程、二次災害が酷すぎるんだ」

「そうだね、危うく第三次世界大戦が勃発しそうになったもの」

上から順番にキャップ、クリス、姉さん、モロ

「あわわ、なにがあったんでしょうか?」

「駄目だぜまゆっち、これ以上は聞いちゃいけねえってオラの本能が言ってるやがる」

とにかく、あの人は悪くない。

はあ、今頃なにしてんだろな？

Side out

「生、大ジョッキで三つね」

「我にはつくねとモモ串を」

「この鶏皮を持ってきなさい」

場所は居酒屋、俺と揚羽とマルギツテで飲んでた。本当は揚羽とだけ飲むはずだったのだが途中でマルギツテと出会い、そのままここまで

実は俺達は面識が既にある

揚羽とは幼馴染み、マルギツテとは半年前の戦場で

これは前に言ったか…

揚羽とマルギツテは揚羽がリニューベックに仕事で出向いた時に中將と一緒に遭遇

世間は狭いもんだねえ

「おや、私達の分の注文はないのか？」

「すまん、ウメ先生の分の注文も……って、うおい！」

いつの間に来やがった！

「神楽、楽しそうだな」

「おいおい桐生…若い美人の子を二人も侍らせて飲みに来るとは。しかも俺の元・教え子と現・教え子…流石のおじさんも感服だぜ」

やってきたのはヒゲとウメ先生

「久しぶりであるなヒゲにウメ殿」

「久しぶりだな揚羽、元気そうだなによりだ」

「うむ、この留年生徒とは違い頑張っているようだな。噂はよく聞くぞ」

親しげに話す三人、え？　なんで居酒屋にすることが怒られないか  
って？

若いな君は、高校を卒業しちまえば大人達はある程度は黙認してくれるんだよ！！

まあ俺も本当は卒業してるはずだしね。

「とにかくだ、お姉さん生大ジョッキ二つ追加ね」

一分もするとウエイトレスのお姉さんがビールを持ってきてくれた

「ではでは皆様、かんぱい！」

「……乾杯！」「……」

キンと音をたてて乾杯をし、一気にビールを飲む

「かあ！ 仕事終りのこの一杯が堪らねえ」

「誇り高き祖国ドイツに感謝なさい」

「本当にドイツ様々じゃな」

確かにこんな美味しいものを作ってくれたドイツの先人達には感謝だが俺の興味は違つところにある

チラリと横を見ると

「くくくくく………ぷはあ」

「いやはや流石ですなウメ先生、豪快な飲みっぷりです」

二年前、俺の担任がウメ先生になる一年前

入学してから半年ぐらいの頃から俺はヒゲの協力をしている。

何故かって？ 馬鹿野郎、俺等みたいな非モテ組にはヒゲがウメ先生に挑む事自体が勇者

いや、ウメ先生に挑む行為は全生徒に希望を与えた

百代に告る、爺さんに喧嘩を売る

それに匹敵する行為なんだ

皆に夢を魅させてくれよ

というわけで俺はヒゲの手伝いをする！！

零 零零零吉秒でのアイコンタクト

(なんとか二人だけで話せる状況に)

(任された)

難しい話である、だが必死にやればなんとか

そんなことを考えていた頃もありました。

「どうしたヒゲ、もっと飲まんか」

「そうです、私に注がれることを感謝しなさい」

「いや、嬉しいんだがあのな…」

ヒゲの所には連れ二人、では肝心のウメ先生はというと

「ほれ、男なら一気にいかんか」

ドボドボと酌をしてくるウメ先生、女性陣は全員酔っているようだ。

しかしこれでは予定とはまるで反対じゃないか

仕方がない、ここは予定を変更するか。

「なあ、ウメ先生は気になる異性とかいないの？」

「……………それはどういう意味だ神楽？」

む、疑われてるな

「いや、元・教え子としては恩師の婚期が過ぎそうなのが悲しくて……………」

「余計なお世話だ！」

鞭がないから叩かれなかったが顔を紅くしている

おお、ウメ先生が照れるなんてなんか新鮮な感じだ。

「気になる異性かあ……………」

そう言つてウメ先生がヒゲを少しだけ見ると

「…居ないこともないかな」

「なんだ、ヒゲが気になるのか」

ヒゲエエエエエエ！

俺は！ 今！！ 感動している！！！！

「な、な、な、なにを言っておるんだ神楽」

「ウメ先生、いいから気になってるんだったらアタックしろよ」

「いや、恥ずかしいだろう！」

「ああ！ なに言っただやがるこの人は！」

「いいかウメ先生、案外なヒゲは押しに弱いんだ。先生は美人だし一殺だつて」

「む、むう、ならば明日からやってみるか」

顔を紅くしながら唸るウメ先生

「どうたのだヒゲ、目頭を押さえて」

「俺は！ 今！！ 猛烈に感動している！！！」

「とうとう頭が狂いましたか」

聞いていたのかヒゲ

「とにかくだ、アタックしてみれば？ 勢いに任せることも必要ですよ？」

「そうだな。ふっ、元・教え子に諭されるとは私もまだまだだな」

決意を固めたな先生、なによりだ

(どうよヒゲ?)

(最高だ、この恩はいつか必ず返すぜ)  
こうして夜も拭けて行く。

## ヒゲとウメの接近（後書き）

「は〜いエブリバーデイ、今回も始まりますよLove川神 司  
会は私二年のスキンヘッド井上準とパーソナリティーの」

「人生、喧嘩上等、酒池肉林、三年川神百代だ」

「しかし、やっと始めましたねLove川神」

「そうだな、作者も今回の話を書き終えた後に思い出した感じだな」

「仕方がないんですよ、彼だって好きで忘れてた訳じゃ「良いから、さっさと読んで私を桐生先輩の寝顔を見させる」理不尽だ…気を取り直して読みますか」

Q、この作品のキャラの強さってどんな感じですか？

「これは俺も気になる」

「そうだな、私が見た感じこんなかな？」

桐生>>【百代の憧れ】>百代>>揚羽>四天王>マルギッテ>ク  
リス=ワン子=京>>男子陣

「男子扱い悪！！」

「当たり前だ、桐生先輩以外の男は弱いに決まっている」

「あながち否定できないから悔しい、じゃあ次のお便りです」

Q、目の前に涎たらしながら無防備に寝ている桐生先輩がいたらモモさんはどうしますか？

「襲って食われる」

「襲うのかい！ しかも食われるのかよ！」

「ああ、むしろ毎回セクハラしてきてもそれ以上はなににもなしだから私も欲求不満で……」

「知りません」

Q、では川神院で寝込みを襲えば？

「それだ！」

「逃げて、本気で逃げて桐生先輩」

「桐生先輩の寝込みをかあ、ふふふ、じゅる」

「あゝなんかモモ先輩がどつか飛んじやったのでまた次回、じゃあねえ！」

いいよ、俺は諦めた（前書き）

ファミリー入りさせるか悩んじゃうよな、うん。

なにかストーリーの方針で良い案があったら教えてください。

いいよ、俺は諦めた

1日目 月曜日

百代side

「さて、お前ら金曜集会の時のこと覚えてるな？」

いつもの通学路、ワん子はランニングで居ないが変態大橋の上を歩いていた。

「ああ、任せろ。幸い隣の席だししつこくやってみる」

私達としても桐生先輩がファミリーに入ってくれるのは凄く嬉しい  
そもそも今までだってファミリーの一員みたいな感じだったのだし  
今更断られるとは思ってもいない。

そんなこんなで教室

「だが断る！」

まさかの断られた。

「…なぜですか？」

「いや、そんな捨てられた子犬みたいな顔で俺を見るなよ。…ゴホン、理由か？ 理由は簡単だ」

そう言つて先輩は教室の入り口の方を指す

私はそちらを見ると誰も居なかった

「なにもないじゃ、あれ？」

顔を戻すと先輩は居らず開け放たれた窓しかなかった。

「に、逃げられた」

この日、結局桐生先輩は見つからなかった。

Side out

二日目 火曜日

クリス side

「それで駄目だったのか」

「ああ、すまない」

どうやら桐生殿はモモ先輩から逃げたらしい。

むう、逃げるとはそれでも武士なのか？

「おはようございます、お嬢様」

自分達が歩いていると向こうからマルさんがやってきた。

「どうやら桐生のことを話していたみたいですが？」

「ああそうなんだ、実は」

私はマルさんに事情を説明する

「成る程、無茶ですね」

マルさんの言葉に私達は首を傾げる

「彼は私と共に戦場を駆け抜けた戦友です。数ヶ月の付き合いですが彼のことはある程度は理解しているつもりです」

なんと、桐生殿はマルさんとも知り合いだったのか！

「でも俺は諦めないぞ！」

キャップがそこまで言うなら自分も頑張るか

というわけで屋上

その入り口の手前にファミリーの皆で集まっていた。

「京、自分の目は狂ってしまったのか？」

「ううん、多分狂ってないよ」

「あわわわ、実は凄い現場なんじゃないんですか？」

屋上では普段からは想像が出来ないようなニへつとした笑いをしながら桐生殿を膝枕して頭を撫でているマルさんが居た。

あの様子からして寝ていた桐生殿を見つけたから膝枕した感じだ。  
隣ではモモ先輩が悔しいそうにしている。

まさかと思うがマルさんは桐生殿に惚れている？

だけどモモ先輩も惚れてるみたいだし…

自分は大変な事に気がついてしまったのではないのか？

結局この日は何も言えず一日葛藤し続けるのであった。

S i d e o u t

三日目 水曜日

俺は学長室にいる。

理由は簡単だ、今日は雨

屋上は使えないから学長室でくつろいでいるだけだ。

「しかし困ったもんじゃの」

最初こそとやかく言っていた爺さんだが目の前で俺と将棋を指している。

「なにがだよ爺さん」

「百代の話じゃよ」

なんだってんだよ。

「あやつまた鬪いに飢えてき始めての」

「なら揚羽とかワン子とかぶつける」

「無理じゃよ、九鬼揚羽は財閥の仕事で忙しく、ワン子は実力が及ばぬ」

「だが成長はしてるだろ？」

「いいや、御主は気が扱えんから分かんと思うが一子の気は一年前とほとんど変わっておらんのじゃよ」

ふむ、どうやら修行の成果は出ているようだ。

一子には修行をしながら自分の気を抑えるようにしてもらっている。そうすることによって気の扱いが上達する上に相手に実力を覺らせない。

一撃放てば本来の実力が知られてしまつが逆に言えば一撃目は分からないってことだ。

川神院師範代になるには恐らく爺さんが百代と鬪わなければならぬいだろつ。

一撃目で最高の一太刀を入れて勝負を決める、百代の場合は瞬間回

復があるが対策も考えている。

「ならあの風間ファミリーの黛は？」

「あの娘はそういうタイプじゃなからう」

それもそうだな、なら相手は居なくね？

「じゃから頼むぞ桐生」

「嫌だね、拳が軽い奴なんかと仕合つつもりはない」

「百代の拳が軽いと？」

怪訝そうな表情で問いかけてくる爺さん

「軽いね、いくらあいつに俺が攻撃されようと倒れる姿が想像できない」

「ふむ、確かにの」

確かにのって爺さんも理解してんじゃねえか

「百代は確かにお主に負けた時よりも強くなった、しかし……」

その続きを俺は言わせなかった。

「駄目だぞ爺さん、王手だ」

「ぬ、待つてはくれんかの？」

来たな、この待ってね戦法

「待たねえよ、それよりさっきから扉のところで聞き耳たてる奴ら入ってこい」

いきなり呼ばれて驚いたのか騒がしい、少ししてゆっくりと扉が開いた。

「ど、ども」

「こ、こんにちわ」

「お邪魔します」

「バレちまってたか」

入ってきたのは風間ファミリー男性陣

なんかモロは恐縮しながらも怒っているようだ

気にせずに話しかける。

「盗み聞きは感心しないぞ君達」

「いや〜気になっちまって」

「女絡みの話かと思ってよ」

風間と岳人は開き直ったか

「ところで今の会話気になったんだけども」

「そうだねモモ先輩が弱いつてどういう事かな？」

大和は軍師らしく話しを切り替えに

モロは完全に頭に血が登ってやがるな

「そのまんまの意味だ、百代だけじゃない。クリステイアーネも京も黛もワン子も拳に威力はあつても重さが無い」

「ワン子はあるなにも頑張っているのに？」

「これは修行の善し悪しは関係ない、いくら修行したとて重くはならない」

理性崩壊寸前のモロが少しだけ正気に戻った。

「これは女子連中には言うなよ、自分で気づかなきゃ意味がない」

これは簡単だが一番難しい武の極みが一つだ

「あいつらの拳にはなにも詰まってるないんだ。それは覚悟だったり憎しみだったり想いだったり、とにかくくなくにも詰まってるない。だから揺るぎない意志を持つ相手が倒せない」

偶然かもしれんがあいつらはその手の相手と闘ったことがないんだろつ。

「俺としてはそんな奴が川神流の総帥や師範代になることを認めな

い、いくら強がることもな」

納得してくれたのかモロの雰囲気に戻った。

「すまないな、お前らの仲間を馬鹿にするようなこと言って」

「うっん、そういう理由なら別に良いよ」

「助かる…ところでなんの用だ？」

思い出したように一同が気づく

「風間ファミリーに入ろう」断る「ぜ」

一蹴すると風間が少し泣き目で駄々を捏ねる。

「なんでなんだよー！」

「ファミリー追加は京が嫌がるだろ？」

あいつの排他的なところは世界でもトップク「京なら普通に賛成したよ」ラスだから…へ？

なんですと、あの京が？

ええい、ならば違う手だ。

「それに百代がいるし、直ぐに闘いたって言って」桐生先輩って川神院に泊まってるじゃん「むう」

ああ糞が、断る理由がなくなった。

「なあー頼むよー」

俺に寄りかかって駄々を捏ねる風間

「ああ、つたく、離れやがれ！」

「「「「なら入れ」「」「」

どうする俺？

いいよ、俺は諦めた（後書き）

「へーい、エブリバディ！ ようやく始まりましたLOVE川神、パーソナリティは子供は宝、大人は肉の塊、二年のスキンヘッド、井上準と」

「喧嘩上等、酒池肉林、三年の川神百代だ」

「しかし、風間達が攻めてますね」

「ああ、できれば私も混ざりたい」

「それは桐生先輩の貞操が心配です」

「私の心配じゃないのか？」

「では早速お便りを読みましょうー！！」

「逃げたか…まあいいさ」

Q ファミリーのキャラで出番の差が激しくない？

「……………」

「……………」

「気にせずにいくか」

「そつっすね、いずれは増えるはずですから」

Q、大和はどのルートに行くんですか？

「京」

「ちよつ、モモ先輩！ 勝手なことを言わないでください！..」

「何言ってるんだハゲ、私はなにも言っていないぞ？」

「え？ じゃあ誰が？」

「もちろん私が」

「うおっ！ いつの間ここに椎名が居やがる！」

「こら京、勝手に入ってきて既成事実をつくるなんて駄目だぞ」

「ちえ、わかった出ていく」

「ふう、京の大和LOVEにも困ったもんだ」

「で、実際誰に惚れるんですか？」

「さあな、この話はオリジナルの展開だからむしる原作の話が圧倒的に少ない…てか、ない」

「え？ じゃあ」

「そうなんだ、誰になるかは決まっていない」

「そうなんですか…」

「いつそのことLOVE川神でアンケートやるってもあるんだが  
作者は投票がなかったらとビビッて大々的に言えないんだ」

「そうっすね、最近スランプ気味だし、感想も少ないし」

「でもPVが四万突破したんだよな」

「その割にはねえ…」

「とにかく気長にお便りを待つか！」

「これ以上、話すのも危険ですしね！ では皆さんバイバイ」

**板垣家との遭遇、そして卒業式？（前書き）**

文章指摘されちよつと編集、これ以上やると今後の物語に関わってくるから申し訳ありません。

今回は少しエロいです

## 板垣家との遭遇、そして卒業式？

どうも皆さん、こんにちは

桐生です

僕が風間ファミリーの一員に誘われて一週間が経ちました

なんとか風間ファミリー入りは断ったのですが未だに勧誘は続いています。

「はあ、もう嫌になるわ」

ぼやきつつも拳を振るう、殴られた男は壁まで吹っ飛ばされる。

「ったく、いきなり因縁つけて来やがって」

「竜、大丈夫かい？」

俺が男を気絶させると後ろから明らかにSっぽそうな女性がいらっしやられた。

「あゝ、あんたこいつの彼女さんかい？」

「違うよ、姉さ」

「なら丁度良い、後は任せた」

スタスタと歩き去ろうとする俺

「ちよいと待ちな、せめて名前ぐらいは教えてもらえないかい？」

「ただの名も無き不良さ、気にするな」

誰が名前なんて教えるか、住みかを知られたら面倒臭い

今度こそ立ち去る、後ろからはなんとも言えない殺気を感じつつも  
気にせずに

そんなこんなでやってきました工業地帯

今日の目的はユートピアと住まい探し

噂の薬がどんなものか一度、見てみたい  
いつまでも川神院で世話になっているのもマズイと思うし、揚羽に  
世話になるのも気が引ける

ここら辺は治安が悪く、家賃が安い物件が多い。

スモッグの影響が少ない端の方の家になっちまうが問題はないだろう  
のんびりと歩いていると向こうから怒声が聞こえた。

面白そうだしいくか

????side

「糞、死ね！」

もう何十人倒しただろうか？

私のアイアンの先は血で真っ赤になっている。

「食らえ！」

「はっ、誰がそんな遅い攻撃喰うもんっ?!」

避けようとしたが予想以上に疲労していたらしく膝が崩れてしまった

眼前には金属バットが迫る

明らかに直撃コースだ

死んだ

そう私が思った時

「Let's party time !！」

目の前にいた男がいきなり現れた男の跳び蹴りを頭にくらい吹き飛んだ

「面白そうなことやってんな嬢ちゃん」

顔を上げると黒髪で水色の玉が付いてるブレスレットをした男がいた

「残り全員、もらっていい？」

「え、あ、うん」

私が頷くと男はニカツと笑い、不意打ちしようとした男の頭を掴んで

「十秒で終わらせてくる」

そのまま手裏剣のように投げた

正に圧倒的だった。

殴っては投げ、蹴っては吹き飛ばし

百人近くはいた不良共を十秒どころか五秒で全て倒してしまった

辰姉より強い人なんて初めて見た。

私は疲労でうまく動かない体を無理矢理動かして男の下へと向かった

S i d e o u t

呆気なかったな

もう少し手応えが欲しいが、ただの不良だしな

それに俺は百代みたいなバトルジャンキーじゃない。

「あ、あの」

振り返ると赤い髪をしたゴルフバットを持っている嬢ちゃんがいた  
背は俺の胸ぐらいだからワン子と同じくらいか

「んだ、怪我してんじゃねえか」

ポケットから傷薬を出して嬢ちゃんの頬に塗る

「や、ちょー!」

「動くな、傷の治療が遅くなると痕が残る」

膝も怪我してやがるし、ああ、腕も

とりあえず傷の治療は終了、傷薬をポケットにしまう

「あ、ありがとな」

「気にするな、しかし嬢ちゃんどうしたんだよこいつら」

足下に転がっている気絶した不良共を指す

「そいつら、いきなり私のことを襲って来やがったんだ」

「ふ〜ん、いきなりね」

なんか恨みでもあったんだらうか？

「ところで嬢ちゃんの名前は？」

ビクツとする嬢ちゃん、変なこと聞いたのか？

「え、え、え、天使」

「聞こえないんだが」

凄く小さな声でボソボソと言う嬢ちゃん、いや聞こえませんぜ

「いたがき えんじえる板垣天使だよ！」

顔を真っ赤にして大きな声を出す天使、うるせえよ

「俺は神楽桐生、制服着てるからわかると思うが川神学園の三年だ。ま、一年留年しちゃったんだけどな」

でも一応は三年だ

さてと、住まい探してもしたいから嬢ちゃんに案内でもしてもらおうかね

嬢ちゃんを見るとなにやら驚いて固まっていた。

「な、なあ、あんた」

「あんたじゃない、俺は神楽桐生だ」

「き、桐生、その、私の名前をどうも思わないのか？」

「？ 板垣天使って名前をか？」

「そ、そうだよ」

「それがどうかしたのか？」

なにを言ってるんだ天使は

「いや、なんでもない」

「変なこと聞く奴だな」

「なあ桐生、私のことは天って呼んでくれないか」

「分かった、天も俺を好きに呼んでくれ」「なあ桐生、私のことは天って呼んでくれないか」

「分かった、天も俺を好きに呼んでくれ」  
頬を朱に染めながらも頷く天

なんだろなこの保護欲は

「ところで天、助けた礼とは言っちゃなんだがなんか良い家知らないか？」

俺が望む条件を言うと天は少し考えて

「……………一つあるぜ」

「なら行こう!」

天を無理矢理おんぶして出発する

天が恥ずかしいがってなにか言ってるが気にしない

「で、なんでこんなところにいるんだ？」

やってきたのは地下クラブ

まさか、ここに住めと？

「桐生の目的は住まい探しとユートピアだろ？」

「ああ、そうだな」

「ここにユートピアがある」

成る程な、だからここに俺を連れて来たのか

俺と天はクラブの端にあるバーで踊っている奴等を見ながら話しを

する

「ジンを一つ」

「私はいつものとオレンジカクテル」

クラブは沢山の人間で埋められている

中には薬で壊れかけている奴もチラホラという

「お待たせしました」

渡されたのはジン

天にはオレンジカクテルと白い粉、そして注射器

チラリとだけ俺はそれを確認して直ぐに視線を天に向ける

「まあとりあえず乾杯だな」

「ん、乾杯」

一気に半分まで飲みほす

天もグラスに入ったカクテルを飲みほすと注射器に手を伸ばした

そして腕に注射を打ち込む

そっか、天はユートピアの常習者なのか

だからこそユートピアの在処を知っていた

「ははは、最高の気分だ」

そう言っつて擦り寄ってくる天

「ちょっと付いてきてくれ」

手を引かれ俺はクラブの奥にある一室に案内された

部屋にはシャワー室とベッドが一つ

「はあはあ、きりゅ〜」

なすがままにされている俺は天にベッドに押し倒されてしまった

「どうしたんだよ、てんむう!？」

俺の言葉は天の唇で遮られる

二分程、求められる通りにキスをして唇を離すとそこには出来上がっている天がいた

「へへへ、今の私のファーストキスなんだぜ」

うおい！ それってマジかよ

「駄目だ、我慢出来ねえ」

おもむろにスカートを脱ぎだした

「なあ桐生うゝ、我慢できねえんだよ」

色っぽくねだり初める天

「昂って、濡れて、発情して、我慢が出来ねえんだ」

これってもしかしなくても卒業式？ 初めての共同作業？

「初めてだから優しくしてくれよ」

俺に跨がった天は俺のズボンのチャックをずらして息子の姿を晒すと

「いくぜ、あつ」

プツンと糸が切れた人形の様に倒れた

俺は天を受け止めると規則正しい寝息が聞こえてきた

ちよ、生殺しですか

一度、溜め息を吐き天にスカートを履かせた

俺はクラブを出て板垣家に向かった

ここいらでは有名な一家であり場所も直ぐに分かった  
歩くこと十分、ようやく着いた

普通の一軒家

インターホンを押すと中から青い髪の女性がやってきた

「どちら様？」

「天の友達です、お宅のお嬢さんを届けに来ました」  
背負っている天を預ける

「お兄さんの名前は？」

「俺の名前は神楽桐生、よろしく」

「私の名前は板垣辰子ね」

なんかこの人からは同じ匂いがするぜ

「あ、そうだ天が起きたら『やるならもっと堂々としな』って伝えておいて」

じゃあね〜と手を振りながら見送ってくれる辰子

はあ、百代にでもセクハラしに行くか

三日月が綺麗な夜の出来事であった

「なあ、あの二人どうしちまったんだ？」

「竜の奴はこの前、一撃で伸されちまってリベンジに燃えてるんさ」

「ほう、竜兵をねえ」

「私も見たけど中々に強い奴だったよ」

「じゃあなんで天はニヤニヤしながらゴルフバットをスイングしてんだ？」

「なんか男に惚れたらしい」

「惚れただあ？」

「この前、ユートピアの力を借りて迫ったらしいんだが副作用で倒れちまったらしくてね」

「あゝあ、嫌われたんじゃないの？」

「それが天を家まで届けてくれて辰子に天が目覚めたら『やるなら堂々としな』って伝えてほしいって言われたんだとさ」

「その男ってのは、相当な度量だな」

「そんなこんなで二人ともあんな感じさ」

「辰子は？」

「土手で気に入った人がいるから一緒に昼寝してくるらしい」

「オジサン泣いちゃうぜ？」

**板垣家との遭遇、そして卒業式？（後書き）**

今回のLove川神はお休みです。

出来ればアンケートにご協力ください。

本格始動、ワん子の修行（前書き）

ワん子 への進言が凄え

## 本格始動、ワん子の修行

どうも皆さん、こんにちは

桐生です

僕がああぬか喜びをした日から一日が経ちました。

天ちゃん結構好きな子なんだけど…迫るなら薬の力無で迫ってほしかったぜ。

しかし昨日のことを思うと心臓の鼓動が早くなる、それに息苦しくも…これが恋!?

「なんで知らない女の匂いをするのよお！」

「ぐえっ、ワん子ギブギブ！」

違いますね、純粹にワん子に首絞められてるだけですな。

「お姉ちゃんパンチ！」

「しほっ！」

いきなりやってきた百代が無双正拳突きなんて物騒な技を鳩尾に入れてきやがったので完全に不意打ちというつことと世界の補正による力で俺の意識はブラックアウトする。

駄目だ、ここでは体が持たねえ。

はやく新しい住居を探さねば。

でもここより優良物件なんてそうそうない。

多少我慢すればいいんだ

最上級のセクハラ相手

最高級の癒し系ワン子

食事も美味い

風呂が広い

相棒であるバイクが弄れる

あれ？ なにも文句無くね？

悩む俺だった。

夜、俺はワン子の修行をしていた

今日は安息日なので俺の部屋で座学を行う

と言っても気の使い方はわからないので戦闘への気構えみたいだ

「さてワン子、最強の一撃ってなんだと思う？」

「最強の一撃？」

「応供さ、俺も爺さんも当然使える」

「うーんなにかしら？ なんかの流派の奥義？でも桐生さんは武術を習ってないし」

考えるワン子

しばらくは頑張ってみたようだが諦めた

「仕方がない、最強の一撃を見せてやる」

俺はすつと立ち上がる

「え？ でもここ室内だし危くない？」

「それは大丈夫、よく見とけよ」

ワン子の正面に立って俺は架空の敵の顔面へと力任せの一撃をお見舞いする

「これが俺が考えうる”俺の”最強の一撃だ」

「今のが？」

ポカンとするワン子、直ぐにこちらを見て

「でも今のって全然凄くないですよ？」

「だって力任せに殴っただけだもん」

ケロリと答える俺

「ワン子、最強の一撃ってのはなにも威力が一番高いから最強なんじゃない」

これはあくまでも俺の考え

「自分にとっての最強の一撃ってのは人それぞれ。俺の殴り、百代の富士砕き、爺さんが使う顕現で現れる古の神々達、様々な”最強”がある」

「俺が最強だと信じてるのはさっきの技、今までの喧嘩の中で何百、何千、何万回と放ち、敵を倒してきた…ようするに積み重ねの一撃だ」

「積み重ねの一撃？」

「そうだ、現状ではワン子には奥義はあるが百代達には見破られている。お前が悪い訳ではないが修行中をずっと見られてきていたんだ、仕方がない。だからこの積み重ねの一撃は見破られているからこそ最強なんだ」

「????？」

そりゃそうだろな、訳がわからないのも分かる。

「お前は何回構えたところから雑刀を振ってきたんだ？ 下手をしたら億の回数を振ってきたのかもしれない、その一撃が弱いはずなからう」

「……自然体」

ワン子の野性的直感がなにかを感じ取ったようだ。

「うん、なにかわかった気がする！」

元気よく声をだすワンコ

うんうん、元気が一番！！

「今日はもう遅い、寝る。明日は朝から修行だぞ」

「はい！」

くくく、修行だぜ。頑張れよ一子

翌日

最近、跳んでばっかじゃね？

そついう風に細かいこと気にすると嫌われるよ？

「準備は出来たか？」

「出来たわ！」

朝早く、川神院の共用駐車場に俺とワン子はいた。

ここには俺のバイクがあるのだ

九鬼の新開発した単車よりも優れ様々な道を走れる

時速も最大で230kmまで出せてしまう

後ろにワン子に乗せて俺は発車する

今日は大忙しになる

「桐生さん、ところでなにをするんですか？」

「ん？ 百連勝」

「はい？」

だから百連勝

ワン子よりも全能力が少し上の相手と対戦して勝ち続けてもらう

「当然ながら数日間に分けて戦ってもらおうぞ」

一日百人なんて周りきれん

運転中のためワン子の方を見れないが嬉しそうにしているのは分かる。

一人目

「では、御相手願う」

「押忍！ よろしくお願いします！！」

相手は同じ得物の使い手

頑張れよ

「しゃ！」

相手の戦い方はワン子のような威力タイプじゃなくて技で絡めてを狙ってくるタイプか

予想外だが行幸だ

川神院では他の流派の技をパクるのが許されているからどんどん技を盗んでもらいたい

「食らえ！ 妙技、白刃の大蛇！！」

「きゃ！」

咄嗟に防げたが危なかった、あれは少々厄介な技だな

「お返しよ！ 見よう見真似白刃の大蛇！！」

振り払う薙刀の剣筋がぐにやりと曲がった

「「なっ！！」」

声を上げたのは俺と対戦相手

まさか一度見ただけで？

意表をつかれた相手は撃沈

「勝者、川神一子！」

俺は慌てて一子に話しかけた

「だって桐生さんの攻撃はあれ以上に変化するのよ？ 真似する為にどれだけ練習したのか」

なるほど、そういうことか

とりあえず頭を撫でて褒めておいた

二人目

次は徒手空拳相手だ

道場の中でも一番の実力者である

立ち会いはここの師範代

「始め！」

「川神流山崩し！」

最初に仕掛けたのはワン子

しかし相手はそれを見切って一本後ろに下がる

「今よ！ 川神流大車輪！！」

それで勝負がついてしまった。

あるえ？ 相手の実力を測り間違えたか？

移動中

俺は悩んでいた

ワン子の実力よりも上の相手を用意したつもりが期待外ればかりで結果的にワン子の圧勝

一人目はなやんでいたという技の習得の為に貢献できたが二人目に至ってはなあ

「一気にレベルをあげるか」

三人目

「次の相手は最初の二人と格が数段違うから気を抜くなよ」

「任して！ 今日の私は調子が良いのよ！！」

むしろコンディションが最悪で欲しかった

「満身だけはしないでくれよ…：ワン子、これからの試合での課題は相手の技を盗め」

「そして尚且つ改善ね」

そこまで分かっているなら良い

三人目の相手は一人目と同じ薙刀使い

「よろしく頼みまする」

「こちらこそ弟子の為にすまない」

俺は相手の師匠と握手をする

こちらからはワン子、相手からは一番弟子

師匠である俺らは見物

審判は師範代

「始めい！」

開始の合図と共に両者が動く

「オラララララララララララララララララララララララ！」

突きの壁がワン子に迫る

「川神流地の剣！」

それを強力な一撃で尻払い即座に反撃

しかし相手も読んでいたのかギリギリで避けて最小限の動きで反撃を繰り返す

「ぐわあ！」

ワン子はそれを受けてしまい若干後退る

「負けるもんか！」

後ろに下がる勢いを使ってサマーソルトキック

これは流石に相手も予想外らしく直撃を受けた

両者直ぐに態勢を直して接近する

「良いお弟子さんですね」

「ははは、お宅も粹の良い弟子を持っておるな」

俺らは互いの弟子の話しをしながら暖かく見守っていた

一子 s i d e

桐生さんが言っていた意味がわかる気がする

積み重ねの一撃

血へドを吐き、血の小便を流し、気の遠くなるほどの辛く長い修行を過ごしてきた

その日々の研鑽や思いがこの一撃一撃に感じる

重いわ

とてつもなく重い

肉体ではなく精神への一撃が尋常じゃない

才能だけではありえないこの技の数々

ただの一撃にも重みがある

最強の一撃

この相手が放つのもその境地の一つ

本当、心が折れそうだわ

「見よう見真似白刃の大蛇！」

でも負けられないの

貴方がどれほど努力してきたか

貴方がどれほど悔しい思いをしてきたか

これでも少しは理解してるつもりよ？

「でも私の方があなたの何倍も努力してきたわ！」

既にボロボロだけどこんな怪我で私は諦めない

でも力が入りにくい、思うように振れない

それでも無理矢理振るう

違和感

ほんの少しの違和感

いつもと何かが違う一振り

それは奇しくも私が望んでいた形の振りだった

最速で最高の威力

今までにこんなにも違和感を感じ理想通りの振りはない

吸い込まれるように私の太刀筋は相手に食い込み相手を吹っ飛ばした。

「勝者、川神一子！」

この時、私は何かを掴んだ

Side out

最後の一振り

あれには戦慄を覚えた

何年ものオーバークワークをこなしてきたワンの基礎力は並みの達人よりも上だ

そんなワンが基礎通りの全ての理想的な一振りがあれ

もしもあれが放たれたとすれば百代クラスでもダメージが相当なはず

ただあれはどんな達人でも狙える打ちじゃない

でもだ、でもあれを狙って打てるとしたら？

「ワンの修行の内容が増えたな」

新しい技とこれだけでも収穫はあった

俺は将来を見通して笑う、ワンス子の実力に驚けよ川神院

本格始動、ワンス子の修行（後書き）

ワンス子 にするとても？

なめるなよ！！

皆様お久しぶりです

少々技の説明を

白刃の大蛇

一見ただの一振りだが途中で軌道が変わり相手の意表をつく技

これがワンス子の新技です

ちなみにオリジナル

なんか技のネタがあったら教えてくださいお待ちしております

## 川神院の思惑

大和 side

昼休み、俺らはテレビを見ながら飯を食べていた

「そう言えば今日はワン子、なんで休みなの？」

「さあ？ 俺も理由は知らないがクリスは知ってるか？」

「いいや、自分も知らん」

あの元気が取り柄のワン子が病気なんて考えにくい

『臨時ニュースが入りました』

なんだ？

気になったので俺はテレビを見る

『東京都内にある銀行に立て込もっていた強盗が偶然居合わせた学生二人に取り押さえられました』

「またキャップか？」

「俺はここにいるぞ？」

違うらしい

『生中継でお送りいたします』

画面が切り替わりキャスターの人と現場が映った

『出てきました！ 二人の学生と縄で縛られた犯人達です！！』

出てきたのは俺達がよく知ってる顔だった

『片方の少女については現在不明ですがもう一人はこの前に革命軍を指揮していた少年です！』

「「「「「ぶっ！」「」「」

いつかと同じように学園中が吹いた

そうテレビに映ったのはカメラのフラッシュをダルそうに受ける桐生先輩と緊張してガチガチになっているワン子だったのだ

学校休んでなにしてんだよあの二人

Side out

「いやあ、明日から学校で大人気になるぞワン子」

「…桐生さんといると退屈しないわ」

苦笑いを浮かべるワン子

俺はともかくとしてワン子はこういう経験は始めてだったか

「それじゃあ三十八人目を倒しに行くか」

「はいっ！」

時間はないんだ、爺さん達が動きだすとしたらそろそろ

それまでに最低でもルー先生と同じ領域まで連れていかねば

まだワン子は弱い

実力はマルギッテと同じかそれより少し下

足りない

ワン子には圧倒的に足りない

力が、疾さが、経験が

全てが足りない

恐らく川神院はワン子が武術を始めた時から才能がないと思っていたのだから

だから実践の経験をあまり与えなかった

本人が自分から行う戦闘だけでは不十分

ワン子には雰囲気で実力を隠すような技を教えている

様子的にまだ俺以外には気付かれていない

誰もワン子が成長してるとは思わないだろう

夏休みに入る前には四天王レベルにはしてやるから覚悟しろよワン子

川神院 side

「ふぉふぉふぉ、一子もやるのう」

既に学園の仕事は終わり夕食時

川神鉄心と川神百代、ルーの三人はリビングで笑っていた

「まあ恐らくはほとんど桐生さんが片付けたんだろうがな」

「学校を休んだのはどうかと思いますが素晴らしイ」

テレビにはフラッシュを浴びながらインタビューを受ける二人がいた

それを見ながら鉄心は言う

「しかしの、百代、ルー、今回の話しはこれについてではないのじ

「や

言った鉄心の顔は川神院総代としての顔

「一子の師範代試験についてじゃ」

それを聞いて百代とルーの顔が変わる

「……やるのか？」

「うむ、八月中旬におこなう」

「早すぎルので八？」

「この決定は変えられん、正確な日時は後日伝える、一子にはそれから伝えなさい」

桐生の予想通りついに川神院が動きだしたのだった

S i d e o u t

元・四天王の誇り（前篇）（前書き）

お久しぶりです

約一ヶ月ぶりですかね？

初めての予約投稿：秘かにwktkしておりますwww

まあ長い話は置いといて、始まります！

## 元・四天王の誇り（前篇）

あれからしばらくが経ち、七月上旬

俺はワン子を秘かに何度も戦いに連れてきていた。

もう残り半分を切って残すは丁度10人

もちろん今まで全戦全勝

聞けば凄いと思うが当たり前のことだ。

自分よりも全ての能力が少し上の相手と闘うのだ。

それは確かに分厚い壁だろうがそれぐらい登るなり壊したりしてでも通れねば先はない。

「ほら、また足が止まってるぞ」

「はい！」

ワン子に相手が居ないときは俺が相手をしている。

これまでの戦いで反省点や、今後の課題などもこの時に言っていたりもするから結構重要

そのせいか昔の戦い方と今の戦い方には大きな違いができた。

昔はどちらかと言うと、パワーで攻めていく感じなのだったが今ではスピード重視だ。

何故かって？

ワン子を見ていればわかるがとても良い足を持っている。

それこそ武術家ではなくアスリートにでもなればオリンピックで金メダルを取れたかもしれんほどの。

これを活かさない手はない。

だが本人は気づいていなかったらしく一撃に掛けるようなところが見受けられた。

それよりもだ

一撃の技はこの前教えた。

なので俺は重点的に小技を教えることにしたのだ。

この先、百代だけではなく数多の武人と闘って勝っていくためにはこれが必要不可欠

試合の相手も技が多い相手を多く選んでいる。

最初こそワン子の実力を見甘っていたがちゃんと力量を理解してからは毎日が激戦だ。

幸いながら俺に気の治療術に長けた医者があるのでなんとか傷はほ

とんど完治したりするがどうしても傷は残ってしまっ。

俺としては年頃の子にそんな傷を残してしまうのは不本意なのだ。  
でもやるしかない。

「小技だけでなくフェイントや大技に繋げられるような連打をして  
みる!」

「くっ、はい!」

反撃しながらも俺はワン子に注意する。

「がら空きだ!」

「がはっ!」

蹴りが横っ腹に当たり、ワン子の身体が吹き飛ば。

「今日はここまで」

「あ、ありがとうございました」

よろよろと立ち上がるワン子

感触から骨に異常はなさそうだが辛そうな顔だな。

仕方がない

意識が朦朧としているワン子を背負って俺は歩き出す。

背中ではワン子が規則正しい寝息を立て初めている。

ったく世話の焼けるやつだ。

俺は笑いながら川神院の一室へと向かうのだった。

ワン子 s i d e

「ねえ、きりゆ……師匠」

私は今日も今日とて試合の為に敵と相對していた。

ちなみに師匠とは私が自発的に呼んでいる。

「なんだ弟子よ」

師匠もなかなか乗り気である。

「本当にこの人とやるの？」

「ん？ 当たり前だぞ」

私の今回の敵、それは予想以上の相手だった。

「では始めようか」

ここまでできたら自棄だ、やれるところまでやってやるぞ。

「よろしく頼むぞ、悔しながら四天王の座は降りたが武の鍛錬は怠っていないから安心しろ」

私の相手、元・武道四天王 橘さん

これが残り十人目って…あきらかにトップ5の人じゃない。

「では、始め！」

「はあ！」

私は一気に間合いを詰める。

「見よう見まね白刃の大蛇！」

横薙ぎの一閃、橘さんはそれを撃ち落とそうとしてきたが甘い

「なっ！」

「ちい！」

私は驚いた。

この技は剣筋が途中で大蛇の様に曲がりくねるから普通の防御では防げない技

そうと直感で感じたのか撃ち落としではなく橘さんは急に体を捻じり防御から回避へと変えたのだ。

流石、そんな芸当私には到底無理

ここで距離を取られたら不利だ。

もう一度、今度は直線ではなく緩急やジグザグな動きも混ぜて接近する。

「甘い！」

しかしそれを橘さんは横に広がる気の技で無理やり抑えてくる。

なんとか防いだが距離は開けられてしまった。

ここからが正念場ね。

s i d e o u t

カカカ、良いじゃねえか。

一子はここ数か月で一気に成長した。

それこそ元・四天王に迫るぐらいに。

だが駄目だ、モモ達はこれの更に上に行く。

もっとだ、もっと強くならねばな。

最終的には俺と鉄爺を超える……か、今あの時の瞳と言葉を聴いても惚れ惚れするねえ。

面白い、実に面白い。

一体どこまで登り詰めるやら…期待してるぜワン子

勝負は序盤、しかし激戦であった。

並みの武道家では視認すらできまい速さの攻防

己の全神経を集中させねば一瞬のうちで決着がついてしまうだろう。

故にこれは序盤にして終盤

互いに攻撃を全て捌けているわけではないので体中に無数の傷ができていく。

「乱れ・凧！」

ワン子は素人ですら視認できるような遅さで突然横に薙ぐ。

これを好機と見たのか橘は鋭い蹴りをワン子のこめかみへと放った。

しかし

「ガアアアアアアアアア！」

しかしその攻撃は当たることではなく逆に橘が吹き飛ばされていた。

なにが起きたかなど分からないだろう。

乱れ・凧とはもともと剣術の技で

居合の技をワン子が真似をして自分流にアレンジしたものだ。

まるで凧のような緩やかな動きに見えるが実際は白刃の大蛇のように軌道が読めない刃筋がワン子の間合いで乱立しているのだ。

それに気づかずに入ってしまった橘のミスだ。

中々どうして、これほどの人物を倒した相手

恐らくは島津寮のあの一年だろうが、これを見る限り四天王に返り咲くことも不可能では……無粋な話だったな。

橘の方を見る

「ぐ、まだまだ」

どうやら負傷しているが動けるようだ

眼がまだ死んでいない、気合も十分か

勝負はこれからだぞワン子

元・四天王の誇り（前篇）（後書き）

むむむ、停電とは恐ろしきものなり。

自分って実は第五ブロックに住んでるんですがどうも最近停電が凄  
いんですよね。

街一帯が停電で真っ暗になり、街を歩く度に

『あゝ、ホラーゲームとかの街ってこんな感じなのかな？』

と思いつつ歩いております。

今回の地震の被害に会った方は多いでしょう

そんな方たちの安全と幸福を祈っております。

元・四天王の誇り（後篇）（前書き）

スランプや

ワイが言いたいのはそれだけや

元・四天王の誇り（後篇）

ワン子 s i d e

「舐めるなよ、川神一子」

よろよろながら立ち上がる橘さん

中々足に来ているようだ。

私はそんな橘さんを見て一層警戒心を高めた。

ここで攻めに行けば勝てる

そんなのは素人考えだ

私は満身創痍の橘さんを見ながら思い出していた。

過去90人、自分よりも格上、同格、格下、様々な相手を倒してきた。

誰もが自分よりも実力が少しずつ上の相手

倒したと確信した相手が起き上がってきたとき、言葉には出来ない恐怖がある。

倒れる前よりも増す闘気

満身創痍のはずなのに油断を一向に許さない相手

何度も味わってきた。

その度に苦戦を強いられてきた。

優位に立っているはずの私の全身から冷や汗が滝のように流れ落ちる。

「……………ここからってことね」

「ああ、そうだ。私は立ち上がったぞ川神一子」

見れば見る程お互いにボロボロだ。

膝も笑ってるし、腕も重くて上げるのが辛い。

でも、でもね

「楽しいわね」

「まっただ」

お姉様じゃないけど戦うのが楽しいわ。

こうやって全力全開で自分の本気の全てをぶつけて戦うのって楽しい。

だってわかるんだもん。

今、自分が限界を超えそうだって。

今、目の前の壁を超えることが出来そうだって。

今、目の前の敵を超えそうだって。

新しい可能性がこの先に待っているという確信がある。

楽しいわ、ドキドキするわ、才能がないと諦められていた私がこうして元・四天王の橘さんと闘えている。

誰も……いや、桐生さんと私以外想像も出来なかっただろう。

「いくわよ」

「おっ」

私と橘さん、どちらからでもなく同時に駆け出す

ここからが本番よ！

side out

橘side

「楽しいわね」

「まったくだ」

百代と闘った時

私は慢心していた。

四天王という椅子に座ったことによって自分に酔いしれていたのだろう。

だが百代に負け、その自信は壊された。

自暴自棄になりもしていて、どこぞの馬の骨とも分からん剣娘に負けた。

それは私が四天王の座を降りることを意味している。

悔しかったという気持ちよりも情けないという気持ちでいっぱいだった。

だから私は修行をした。

今度こそ、慢心も、油断も、奢りもなく、戦えるように。

そして私は久々に戦った相手に勝った。

なんと嬉しかったことか

忘れていた勝利の喜び

武を始めたあの頃はまだあった勝利への執念

やみつきになってしまった。

勝利するためにもっと修行を重ねた。

そして、昔と同じ  
ことは確信した。

昔以上の実力がついた

だがそれでは足りない。

もっと貪欲に私は力を求め、今回の話に乗った。

以前見たときは才能を感じなかった少女が、川神一子

今回も一目見た時、昔と変わらんと思ってたが全力で相手をするこ  
に決めた。

そしてそれは正解だった。

初太刀、小技だったもののその鋭さは一流の武人のそれ

外したと見るや追撃を仕掛ける。

それもまた素晴らしい

何合も打ち合っているうちに私は楽しくてしょうがなかった。

ああ、この感覚だ。

このなんとも言えない頭の奥が痺れるような感覚

もっと、もっとと奥深くに

“武”の境地へと深く深く奥底に潜って行く。

武人としての血が騒ぐ

その感覚が私を魅了する

それは私が吹き飛ばされたあとも同じだった。

脇腹が痛い、骨が少しばかり折れている。

だがそれがなんだ

「舐めるなよ、川神一子」

“四天王”としての誇りなぞいらん

今、必要なのは“武人”としての誇り

誇り、根性

精神論ではないがそれが足りなかった。

なんとしても勝ちたい、この相手に勝って私は次のステージへと進む

「いくわよ」

「おう」

私と川神一子、どちらからでもなく同時に駆け出す

この身は既に満身創痍

故に長くは持たないだろう

だが、退くな

前へと進め

この身が亡ぶまで前へと進まねばならん

この対峙する若者に教えねばならん

それが私の役目であろう！

そして私と川神一子は衝突するのであった。

s i d e o u t

元・四天王の誇り（後篇）（後書き）

いつも気になっていることがある。

他の作者様の作品を見ているとたまに出てくる

総ユニーク数やらPV数とはなんぞやな？

あれかな？

週刊ユニーク数とか毎週分の足してるのかな？

俺もそうしよっかな？

ある意味で最終決戦の幕開け(笑)(前書き)

どうも、最近気が付きましたが風間ファミリーが居ないWWW

おいおい、俺ってば存在忘れてたよorz

さて、じゃあ風間ファミリーは今度出しますか

ある意味で最終決戦の幕開け（笑）

ワンスide

「じじ、は？」

目を覚ますと誰かにおぶられているようだった。

「目を覚ましたか」

「あ、師匠」

どうやら桐生さんの背中だったらしい

どうしてこうなったんだっけ？

確か橘さんと闘ってて……

「そつだ、勝負は」

「安心しろ、ギリギリだったがお前の勝ちだよ」

そう聞いた瞬間、私は緊張の糸といつかかなにかが切れて力を無くしてしまった。

「まあ、勝負については後で教えてやるから今日は美味しいもの食わせてやる」

やった！ 嬉しいわ、じゃあそれまでにもう一眠りしましょう

side out

三人称side

「寝たか」

背中からは規則正しい寝息が聞こえる

「ま、今日は激戦だったからな」

桐生は小さく笑いながら家へと向かう

時は少し遡り、橘と一子は共に同時に駆け出していた。

拳と薙刀が交差し、クロスカウンターの様に互いの攻撃が当たる…  
… ように見えた。

「……………ガハッ！」

一瞬だが攻撃が当たった状態で硬直し先に倒れたのは橘だった。

吐血し、前のめりに崩れるように倒れた。

一方の一子は薙刀を杖代わりにしてなんとか立っていた。

「（ふむ、これは…）勝者、川神一子！」

完全に意識を失ったと見て、桐生は勝負の終了を告げた。

最後の攻撃、両者全くの同時に攻撃を出した

本来ならば攻撃の速度の速い橘が先に当てるだろう。

しかし、互いに満身創痍だったことに加え一子は薙刀を普段より長く持っていた。

そのわずかな差

そのわずかな差が勝敗を分けた。

紙一枚分ほどの距離、橘の攻撃は届かなかった。

もしも当たったならば勝者は変わっていたかもしれん。

「良くやったよほんと」

帰り道、桐生は寝ているはずの一子にそう言ったのだった。

川神院 side

「では、その日だ？」

「うむ」

深夜、川神院の道場では師範代達が神妙な面持ちで正座をして並ん

でいた。

上座には川神鉄心と川神百代が座っている。

「明日から丁度一月後、8月の18日に川神一子の師範代試験を行う」  
「う」

それを言った瞬間、道場内に言いようもない緊張感が漂った。

「翌日、一子にそう告げる」

「合格基準としては師範代方全員とジジイが見る中、私と戦ってもらい合格基準を越すこと」

「この試験には情はいらぬ、武人として厳しく判定するよう」

そう、川神院は動き出した。

この時、川神院は間違えていた。

一子の真の実力を

side out

一子side

目を覚ます

どうやらあの後、ベットに寝かされたようだ。

外は暗い、時間を確かめるともう夜の九時だ

ここどこかしら？

知らない場所だし、でも大好きな匂いがする。

辺りを見回すと、ソファに一人の人物を見つけた。

「……桐生さん」

つとと、いけないわ。

師匠って呼ばなきや

特に意味はないけどある種のけじめよね

桐生さんは起きてないようだしちよつと寝顔でも拝借させてもらいましょう。

「zzzz……」

あはっ、なんか可愛いわね

寝顔を突いてみたり

「ん、おう、んん」

おお、面白いわ

もうちよつとグリグリ

「ん、んん、んあ？」

あちゃ目覚めちゃったわ

でも寝ぼけてるわね

「ワン子」

「へ？ きゃあ！」

私の名を呼んだかと思えば急に抱き寄せられちゃった

態勢的には私が上になって桐生さんが下

見ようによつては私が押し倒しているようにも見える

どこうとしたけど、動けなかった。

だって、桐生さんの匂いが間近でしてるんだもん。

無理よ、動こうとするなんて。

ちよつと、ちよつとだけ

桐生さんの胸に顔を押し当てて匂いを嗅ぐ

やっぱり好き

前々から思ってたことだ

桐生さんの匂いが大好き、でもね

もっと桐生さんのことが好き

弟子にならしてくださいってお願いした時も本当は姉さまを倒したからって理由じゃなくて好きで近づきたかったから。

不純な動機かもしれないけど、それでも私は桐生さんと一緒に居たかった。

だから、こうやってると幸せだね。

もうちょっと、もうちょっと良いかしら？

寝てるし、おでこぐらいならキスとかしても

勇気を振り絞って顔を近づけようとしたら

「何をしておるか川神一子」

突然、後ろから頭を掴まれた

この声はまさか…

「九鬼揚羽さん？」

「ふふふ、久しいな」

最大の恋のライバルがやってきた。

s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

ある意味で最終決戦の幕開け（笑）（後書き）

行けるところまで行ってやるんじゃないか

誰かに怒られたりしても更新だけは挫けずにやってやる

勇往邁進だ！！

一日ほのぼの　～寝起き編～（前書き）

どうも、更新が遅れて申し訳ありません。

今回はかなり短いです。

サブタイトル通り、しばらくはほのぼの系で行きたいと思っております。

バトルをお待ちの方は申し訳ありません。

一日ほのぼの　～寝起き編～

「どげなして、こごなつたと?」

思わずエセ方言を使ってしまった。

時は少し遡り

俺が目を覚ますと、そこには知らない天井よ……嘘だ、知っている天井があった。

てか俺の部屋の天井

寝起きから何考えてんだかと思いつつ体を起こそうとしたら異様に体が重たくて動けなかった。

なんでだろうか?

昨日はワン子を橋と戦わせて……それだけだ。

俺が体を動かすことなんてなかったはずだが?

疲労ではないとするとなんだ?　そう考えていたら俺の“両腕”から規則正しい寝息がしてきた。

右腕を動かすとムニユツとした柔らかい感触。

左腕を動かすと右腕程ではないが柔らかい感触がする。

左腕のは分らんが、この右腕の感触は

「揚羽の胸じゃないか」

なぜだ？　なぜにあの俺の枕（決して枕ではなく揚羽の胸です）の感触がするんだ。

アレに挟まれて寝るとヤバいほど眠れるんだぜ知ってたか？

なにせ揚羽印の低反発枕だからな（決して枕ではなく（ry）！！

「まさか……まさかと思うが」

恐る恐る俺は右腕を見ると素っ裸で俺の腕を抱き枕にしている揚羽が居た。

いや…揚羽さん？

おかしいな？　あるえ？

じゃあ、左腕の感触は何なんだ？

そっと、ほんとにそっと、チラ見してみるとワン子が同じように俺を抱き枕にして寝ていた。

なんてこった！！

まさか、俺は二人と事後だったのかよ。

……嘘だろう。

責任を取った方がいいのかな？

でも二人も相手だぜ？

片や幼馴染で大企業の次期跡取りの娘

片や後輩の妹で俺の愛弟子

セクハラ相手とセクハラ相手の妹

この二人とヤツちまったのか！？

なんてこった……

俺は目覚めから恐らく、人生でもトップにランキングしてくるであろう悩みと闘うことになった。

余談ではあるが、この悩みは二人が目覚めるまでの二時間も続き、二度寝した。

ワンスide

私が目覚めると桐生さんの寝顔が目の前でドアップであった。

思わず驚いて声をあげそうになったけどそこはグッと我慢した。

こんな近くで桐生さんの寝顔を見れる機会なんてそうそうにないだから。

唯一、気に入らない点といえば桐生さんの背中に張り付いている揚羽さんぐらいね。

私は揚羽さんに負けじと丸くなり、桐生さんの胸に顔を摺り寄せる。

やばいわ、この匂いって大好き。

ファミリーのみんなですらこんな良い匂いはしない。

私は桐生さんのことが大好きだ。

師として、人として、兄として　　一人の男として。

結構、アピールしてるつもりんだけど桐生さんって案外鈍感だから。

でもそんなところも大好き。

修行の時だって、本当はいけないんだけど桐生さんのことを考えちゃう。

その分、やる気がこみ上げてくるから良いんだけど。

とにかく、私は揚羽さんにだって桐生さんを譲る気はないわー！

師範代になるのと同じぐらいの重要なことよ！

覚悟を固めていく私だった。

side out

揚羽side

ふふっ、よく寝ておる。

残念なことに桐生は我に背を向けている

悔しかったので背中に抱きついてやった。

懐かしい、昔は二人で寝たものじゃ。

しかしのう、気に入らん。

恐らくじゃが川神は目を覚ましておる、桐生にまるで犬のように丸まって顔を摺り寄せておる。

羨ましい……

あ、桐生に抱きつかれた。

本当に羨ましいのう。

こやつは昔っから寝ると抱きつき癖があった。

というか、癖をつけさせた。

なぜかとな？

簡単なことじゃ、我と桐生は幼馴染

昔は二人で一緒によく寝たものじゃ。

最初は我が抱きついておったのじゃが段々と物足りなくなってきたな、それで向こうからも抱きついてくるように躡けたのじゃ。

それが今回は仇になったの。

まあ良いわ、これしきでは貴様になんぞ負けはせんよ。

我は川神一子（恋敵）を睨みつけるのであった。

一日ほのぼの　～寝起き編～（後書き）

メインヒロインはどちらにしようか。

ワンスの登場回数と視点数は多いが揚羽さんも捨てがたい。

どうするっ？

## 川神院からの宣告(前書き)

さてと、本格的にどのルートにいくかそろそろ決めなきゃな。

## 川神院からの宣告

「ほう、ならば一子は橘に勝ったのか」

「ああ、そつだ」

今朝の騒動から少し経って、ワン子は一度川神院に戻した。

気の治療術で完全に傷は癒えているし、川神院には俺の家に泊まりに来ていると言っていたから試合のこととかも問題ではないだろう。てなわけで、俺は揚羽と一緒にベットで寝ながら借りてきた映画を見ていた。

「激戦だった、最後はなんとか根性で勝ったようなものだな」

「良いのか？ 我も貴様から話は聞いているがお前の領域まで辿り着くのだろう？」

「かかか、そつだぜ。なんせ俺の弟子だし、それぐらいにはなつてもらわなきゃな」

俺のその言葉に呆れたような溜息を出す揚羽

「桐生……お前の領域とは“武神”川神鉄心と同じかそれ以上じゃ。我とて未だ遠き場所に居るのじゃぞ」

「そつだが、その遠い場所に至るまでの険しい道のりを全速力で、

この一ヶ月以内に駆け抜けてもらおう」

「……………動き出したのか？」

「さあな、ただ嫌な予感がしただけさ。それに川神院が動き出したのならば尚更だ」

とりあえず、揚羽の胸の谷間に顔を挟んでみる。

なんで突然そんな行動をしたかつて？

そりゃあお前……………ようし分かった。

今から言うことを目を瞑って想像してごらん。

目の前に微笑んでいる揚羽の顔があります。

そして自分の顎らへんには揚羽の豊かな二つの夢が詰まったものが押し当てられています。

俺の後ろでは映画をＴＶで見えています。

多分、きっと、恐らく、揚羽はＴＶに集中しているはずです。

さつきから自分の視界には谷間があって、更にはマスクメロンの先端にある突起物の感触もあります。

自分は男の子です。

獣のように貪り付いて、しゃぶらなかつただけでも偉業を達成した  
と言っても過言ではない。

だが自分はその神秘に触れたかった。

だから挟んだ、後悔はしていない、反省もしていない。

だって、俺は男なんだもん!!

「ふふ、昼間から盛んなことじゃな」

あるえ？

なんかこう、ツツコミがくると思っていたら逆に抱き寄せられたよ？

「川神のも居ないし、やるか？」

………なんですと？

やるか？

つまりはあれですか？

「久しぶりなんじゃ、我も少々興奮している」

だからさっきから鼻息が荒いんですね。

「……揚羽」

「ん……ちゅ、くちゅ、ちゅぽ」

その日、俺らはキスをしながら互いに身体を求め合った。

揚羽 s i d e

桐生との激しい運動を終えしばらくすると桐生は寝てしまった

無論、私の谷間を枕代わりにしてのだ。

……このまま桐生を持ち帰ろうか？

しかしのう、一子の修行のこともあるし

だがこのままでは一子に抜け駆けされてもおかしくはない。

そうじゃ、ならば

s i d e o u t

一子 s a d e

私は川神院に帰ると、なんだか空気が重いのがわかった。

なにかあったのかしら？

奥に進んで行って、私は道場に入る。

どうやら稽古も一段落していたのか、休憩していた修行生達の視線が一斉にこちらに視線が向けられる。

そのどれもがすぐさま悲しげな、なんだか残念そうな瞳だった。

え？ 原因は私なの？

「一子や、おかえり。早速じゃがちょいと来てくれんかの？」

お爺ちゃんが来て、私の事を手招きする。

向かった先は居間、そこには修行生達と同じく重い顔をしたお姉様とルー師範代がいた。

「……どうしたの？」

「いいかワン子、良く聞いてくれ」

お姉様の顔がとても真剣なものになる。

「今日から丁度二週間後の八月の十九日、川神院師範代の試験をお前に行く」

そこで私は全てを悟った。

つまりはみんな、私の力が及ばないから合格できないと思っているのね。

笑い出しそうになるのを必死に堪えながら、私は黙る。

「私情は一切持ち込まない、わかっているな」

「はい、全力を尽くします」

私はそれだけ言って踵を返した。

二週間後か……桐生さんにもこのことを言う必要があるわね。

s i d e o u t

川神院からの宣告（後書き）

……おかしいな？

なんか揚羽さんルートになってる？

いいや、まだだ。

まだアンケートを続行してやるぞ！！

一子VS劍聖 ～開戦～（前書き）

今回は無理やり感が否めません。

文字数も少ないです。

そして今回からバトルメインになりますが、お気に召さない方は申し訳ありません。

それとアンケートについてですがとある方からのお便りで「原作みたいに個別ルートとか作った上でのハーレムとかも欲しい」といただきました。

どうでしょうかね？

よろしければ皆さんのご意見をお聞かせください。

それでは、どうぞ

## 一子VS劍聖 ～開戦～

「二週間後か……」

俺は一子と夕飯を食べながら話を聞く。

とうとう表面化に出てきた川神院、二週間とは予想よりも長い

これは僥倖だ。

「うん、間に合う?」

ちなみに一子、夏休みなので学校に問題はない。

「任せとけ、むしろ予想よりもかなり時間がある」

今日から俺と泊まり込みで修行をするのだ、だから早速

「やってまいりました、次の相手の道場前です」

次の相手と闘わせようwww

「大きな門を潜って、中に入るとそこには一人の初老の男が鎮座していた」

「なんでナレーションっぽく言ってるんですか?」

そりゃあ気分だよ、気分

「あいかわらずだな、お主は」

声の主、目の前に正座して、その座る脇には刀が置かれている。

刀から発せられる鬨気、よほどの名刀か妖刀だとお見受けする。

「ははは、そう睨まないでいただきたいな。彼の有名な“ 黛十一段 ”に睨まれたとあっちゃ、思わずちびつてしまいますぜい」

「戯言はよせ、貴様はそのようなタマではなかるう」

「……………そろそろ真剣になるとしよう」

俺は横で呆然としている一子を撫でる。

「おゝい、そろそろ戻ってこい」

「……………はっ!？」

よしよし、どうやら戻って来たみたいだな。

「きりゆ…師匠、本気で相手はこの人なんですか!？」

「おう、“ 剣聖・黛十一段 ” 正真正銘の最強の剣士だ」

薙刀と刀、確かに違う武器だが俺は一子にあることを知ってほしい。

それを教えるには最高峰の相手が必要で、今の状況で一番適切なの

がこの人しかない。

「さあ、残り九戦なんだ。この人を倒さなきゃ次の戦いに行けないぞ？」

「だからって、橘さんよりも明らかに実力が上ですよ、しかもかなり！！」

おつよ、川神の爺さんと同じぐらいの力量だしな。

もちろん事前に話し合いである程度の手加減をしてもらう。

本気の剣聖とやるのは“また今度だ”

「早速で悪いが、こっちは二週間後に百代との戦いを控えているんだ。さっさと戦わせてくれんか？」

「ははは、あの噂の娘とやるのか。ならば少々こちらも前座らしく力を出さねばな」

一気に膨れ上がる闘気

俺は二人の間に立って審判役を務めるようにする。

「一子、わかっているな？」

「は、はい！ 戦いの最中でも敵を見て、盗める物があれば盗めですよね」

「その通り、わかっているじゃないか。当然ながら相手は剣聖だ、全

ての技を盗むぐらいのつもりでいけ」

「くくく、面白いではないか。では始めようか……！」

こうして、新たな戦いが始まった。

一子VS劍聖 ～開戦～（後書き）

ふふふ、同日投稿が昨日はできなかった。

そしてそろそろ一子と戦わせる相手のネタが居なくなってきた。

誰か良い御方はおりませんか？

具体的には残り三か四人ほど

一子VS剣聖 ～序～（前書き）

みなさんおはこんばんわ

ただいま6：37分投稿です

だからなぜに時間書いたしwww

まず最初に、どうやらこの前のルートの話ですが皆さんにちゃんと伝わってなかったようです。

プロローグが終わった後、完全にルートで物語が変わります。

そして最終的にはハーレム…もといリュウゼツラン的な話を書きたかったのです。

もちろんすべてがオリジナルストーリー

でしょうか？

みなさんのご意見をお聞かせください。

## 一子VS劍聖 序

一子side

私は薙刀を構えて集中する。

目の前の相手は桐生さん曰く、お爺ちゃんと同じ領域の武人らしい

でも昔、釈迦堂さんに負けたと聞いたけど？

気になるけども、それより今は集中だ。

「両者、良いな？」

桐生さんが私達に開戦のための確認を取る

「はい」

「おう」

「では、始め！」

合図と共に黛さんが腰に差した鞘から抜刀する。

「我流・龍旋！！」

大車輪と以前戦った相手の技を合わせた防御の型

薙刀に気を纏わせながら回転し、振るうことで龍が私の周りを旋回するかの如く斬撃が走ることから命名した。

集団戦よりの防御陣、三百六十度の竜巻が私を守る。

キンキンキンキンキン！

六つの金属音

一太刀で六つの斬撃を同時に黛さんは放ったのだと理解する。

「やあ！」

お返しとばかりに龍旋の勢いを利用して斬りかかる。

「甘いぞ、川神一子」

それをしゃがんで避けて私へとケリを放ってくる。

ギリギリのところ上で上体ずらして避け、さらに後方へと跳んで距離を開ける。

しかし、それすらも許されなかった。

着地と同時に首元に剣先が迫っており、残り数センチ

首を捻ってそれも回避し、なんとか今度こそ距離を開けた。

まだ開始数秒で私は何度殺されかけたことか。

でもやはりおかしい、手加減されているのはわかるがとてもお爺ちゃんレベルだとは思えない。

なにがあるのかしら？

side out

ほう、あの追撃まで無傷で躲すとはな

俺は思わず声を上げて笑いそうになってしまった

この百人抜きの最終的な目標は一子を俺達の領域まで引き上げることだ。

つまりは百代の上のステージ、爺さんや俺がいるステージだ

故にこの百人抜きの最終目標は“川神院師範代”ではない

今の攻防

その目標を達成するために必要な力の片鱗が見れた。

それが見れただけでも十分だ。

しかし黛のおっちゃん　　くくく、あんな状態でも釈迦堂さ

んと近い実力が保ててるってのはさすがの一言だ。

さて、俺は今のうちに連絡をいれとくかね。

俺は携帯を開いてとある男へと電話をかけた。



一子VS剣聖 ～序～ (後書き)

さてと、一子と剣聖の戦いはあと何話ぐらい続きますかね？

一子 vs 劍聖 ～初戦終了～ (前書き)

またまた説明不足でした。

最初に、釈迦堂さんとまゆっちのおとっつぁんの勝負の件ですがこれはオリジナル設定です。

原作ではもつと後に戦っています

前話で見た一子の防御技のイメージとしては one piece のゾロの『竜巻』って技を参考にしました。

これぐらいかな？

あとは個別ルートをマジコイスの発売でなにかしら影響があるかもとビビッてる自分がいることぐらいですね w w w

一子 vs 劍聖 ～初戦終了～

一子 side

「白刃の大蛇!!」

横一闪、予測不能なはずの一撃を放つ

「甘いぞ、川神一子」

だけどそれすらも刀で受け止められ、薙刀に刀を滑らせるように切りつけてくる。

なんとか体を捻じって避けるけど体には傷が入る

私は体中に出来た斬り傷から血を流している。

一方、向こうにも何度か攻撃は加えてるんだけどダメージって感じのダメージはない。

これはまずいわね。

「どうしたのだ、攻撃の手が緩まってるぞ?」

「くっ」

けれども私は諦めてはいけない。

確かに敵は強いわ、それこそ圧倒的に

桐生さんは私よりも少し強いぐらいって言ってたけど間違いじゃないの？

でも良いわ。

“勇往邁進”

それこそが私の基本にして全てよ！

「たりやあああああああああああああ！」

「ぬっ！！」

薫さんが私の一撃を刀で受けるも吹き飛ばす。

やはり受け止められた、でも当たったわ。

これで私はまだ戦える。

「……やるではないか」

「まだまだあ！」

諦めるな、私はこんなところで諦めない。

私の目の前にはね、薫さんみたいな人が沢山いるの。

お爺ちゃん、お姉様、乙女さん、釈迦堂さん、ルー師範代、揚羽さん

そして桐生さん

それ以外にもね、多くの人達がいる。

こんなところでいつまでも止まってるわけにはいかないのよ。

もう私にはあまり力も残っていない、これで決めるわ。

いくわよ、このコンボに耐えられるかしら？

劍聖・黛大成！！

壁際にいる薫さんへと肉薄し、技を放つ。

「臙斬り・双はらみ」

まずは大成さんの斜め上下左右両から四方向同時攻撃を放つ

「舐めるな！！」

しかしそれは当然ながら防がれた。

わかってるわ、これぐらい防ぐのなんて。

「川神流奥義・罅！」

がら空きの正面に一撃を加える。

「ぐふあああああああ！！！！」

まともに受けた薫さんは壁に減り込む

あ、当たった？

しかも確かな手応え、これはいけたかしら？

「ふむ、川神一子の勝利」

どこか納得したような声の桐生さんの声

一気に力が抜けた私はそのまま眠ってしまった。

side out

「そろそろ起きたらどうだ？」

俺は壁に減り込んでるおっさんに話しかける

「あいたた、良い一撃だった」

なぜか負けたというのに清々しい表情のおっさん。

「なかなかどうして、やりおるわ。この娘」

「ったく、わざじゃないとはいえと手加減するなんて酷いじゃないか」

「かかか、貴様も知っておるだろう？ 俺の病気のことを」

剣聖・黛大成は心臓と肝臓に大きな病を抱えている。

「ああ、釈迦堂もそれに気が付いたからあんたを殺さなかったんだ  
ろっ」

「そっだ『俺は全力のあんたを壊したいんだ』とか言っていたな」  
はあ、あの人らしいな。

「まあ今回はあの一撃を防げなかった時点で俺の負けだ」

「そっか、ではまた今度頼む」

「ああ、しかし本当にやるのか？」

黛のおっさんが怪訝な表情で睨んでくる。

「もちろんだとも、じゃなかったらこの百人抜きをさせる必要がな  
い」

「俺は二回することになるぞ？」

「第二形態ってことで」

「言い訳が苦しいな」

「そう言わないでくれ……どうしても“残り五人に”あんたが必要  
なんだ」

この修行の最終目標、それは“一子が俺らを超える”

それが出来て一子の修行を完了とする。

「その“入り口である百代”に倒されてしまったなら資格はないが、一子は俺の弟子なんだ。必ず俺らと同じ景色を見せてやるさ」

「ふむ、ではその時は俺も全力で相手にしよう」

「頼む」

俺は眠った一子を背負う。

「そつだ、この名刺の場所に行ってくれ」

名刺を投げて黛のおっさんに渡す

「そこに神医と呼ばれる医者が居る、あんたの番が来る前に治してもらおうんだな」

一瞬ばかりんとしていた黛のおっさんだが、すぐにそれは大笑いに変わった。

「なんと、まさか神医が俺を診るか！ これは俺もまだまだ見放されていないようだ！！」

背中に黛のおっさんの笑い声を受けながら俺はバイクへと向かうのであった。

一子vs劍聖 ～初戦終了～ (後書き)

終わりが中途半端だったがこれはわざとです。

だから叩かないでください、いやマジで(汗)

## 一子と桐生の想い（前書き）

8：14分の更新です

時間書くことをもう、恒例化しようか

今回の話ですが、なんか個人的には無理やり感があったというか

こうでもしなきゃ、多分この先でこれをやるには難しかっただろうな

って感じですよ。

それと人気アンケートで一位のワン子ルート編に突入です。

まあ、既に終盤なんですけど。

とにかく、他のヒロインを選んでくださった皆様方には申し訳ありません。

ワン子の後の個別ルートまでお待ちください。

真剣で居ないかもしれないけど、ワン子が嫌いだからこのワン子編を見ないという方も御安心を！

ちゃんと個別ルート別に楽しめるようなお話にさせていただきます  
！！



## 一子と桐生の想い

家に戻り、俺は一子の寝顔を見ていた。

ふふふ、なんとも可愛らしい寝顔だ。

なんとなく抱きしめたくもなる

この自分の夢へと突き進む、真っ直ぐな女の子を

……一子相手になにを思っているんだ俺は。

俺が一子を好きだとでも？

いやいや、それはありえない。

確かに一子は好きだぞ？

でもそれは妹や弟子と言った親愛の部類だ

決して異性としては

ちらりと一子を見ている。

「むにゃむにゃ、桐生さん……えへへ」

自分の顔が赤くなるのがわかる。

くそ、タイミングよすぎるだろう。

なんで俺の夢を見るんだよ。

恥ずかしさを紛らわす為に俺は一子の頭を撫でる。

「えへへ、そうですね。やっぱりこのみりやまろつすはすごいでしょう」

みりやまろつす!？

俺は一子が夢の中で出会ったものに興味を惹かれた。

「桐生さん危ないわ！ その角には電流が

なんだか俺ってば死にかけてる？

「そ、そんな、桐生さん……」

え？ 俺死んだの!？

「みりやまろつすって食べれるんですか？」

「だからなんだよ、みりやまろつすって!!!」

謎は深まるばかりであった。

風間ファミリーside

「え、ワン子の修行が一週間後？」

金曜集会で、百代は風間ファミリーへと一子の試験のことを報告していた。

「ああ、そうだ。ワン子は数日前より行方不明でいる」

川神院では搜索が行われることがなかった。

一子の夢の為の試験

それは皆が解っていることなので、今は一人にして修行をさせてやるべきだという思いがあった。

「だが安心しろ、ワン子のことだ。桐生さんの下にいるか、どこかで修行をしているはずだ」

川神院での試験を風間ファミリーはなんとか特別に見れることになった。

もちろんそれは百代からの願いで、鉄心がそれを受け入れた。

「今回の試験では私もプロとして手を抜くつもりは一切ない」

「そんな」

「モロ、これも川神院の為だ。私達は武のプロフェッショナル、例え家族と言えども手を抜くことはできない」

悔しげに唇を噛みしめる。

それはこの場に居るファミリー全員が“自分達の知る一子では絶対に川神百代には勝てない”ということをつかっているからだ。

そして、一子には武の才能がない。

凄まじい努力を何年もの間、続けて来たが成果は出ない。

「なんとか、ならねえのかな」

キャップである、風間の咳きは全員の心に響いたのだった。

side out

一子side

私は桐生さんのことが大好きだ。

それも一人の異性として、愛している。

師匠の近くは安心する

なんというか、包まれてるって感じがするの。

キャップと同じように自由な人よ。

でもやっぱり、なんかが違うの。

根本的ななにかが

目を開けると、目の前には桐生さんの寝顔が

……………ゴクリッ

い、今ならバレないわよね？

私は少しずつだけど、顔を近づけてって唇を重ねた。

s i d e o u t

“最凶”

あの頃、俺が目指すべきそれはいつたいなんなのか、いつも考えていた。

川神鉄心や川神百代のような強さなのか？

それとも、違うなんなのか。

とにかくあの頃は必死だった。

川神鉄心が俺を引き取ろうとしたが俺がそれを一蹴して、川神の土地から出て行った。

もちろんだが、俺はまだ小さくて金など一切持っていなかった。

住む家はなく

食べるものも足りず

服など、それこそそこらへんに捨ててあった布きれを使っていた。

必死にあの頃は生にしがみ付く毎日だった。

そう、あの日が来るまでは

唇になにかが押し当たってる感じがしたので目を開けると

頬を上気させた一子の顔がドアップであった。

「っ!？」

「あ!？」

思わずビククリして顔を引いてしまう。

「……………」

「……………」

二人の間に気まずい空気が流れる。

今、なにがあったんだ？

目が覚めると一子がキスしてきていた。

やべ、一文で纏まったWWW

WWW じゃねえよ!!

え？ なんなのさ、いったいこれは!?

「き、桐生さん!」

「お、おう。なんだ?」

師匠じゃなくて桐生さんか、なんだか久しぶりに呼ばれたな。

「その 私とのキスは嫌だった?」

ズキューン!

そんな泣きそうな顔は反則だろう。

「……………いやなわけがないだろうが」

良いよ、認めるよ

「俺は一子が好きだ、それも異性として」

「ほ、本当!」

本当だとも

つたく、俺が一子に惚れてるなんてな

揚羽になんて言われるか怖いが、まあその時は戦ってやるぞ。

俺は歡喜する一子を抱きしめたのだった。

## 一子と桐生の想い（後書き）

次回はどうしようか？

戦闘にするか？

それとも日常編を書くか？

どっちにしてもしばらくはアンケート一位のワン子編

メインヒロインの揚羽さんはいずれかになるし……

他はどのキャラの話を作ろうか悩んでおります。

感想をお待ちしております。

忠犬 vs 天 始まり始まり (前書き)

今回もかなり短めです。

一子とのイチャイチャですがとりあえずは試練が一段落してからにしたいと思っております。

お楽しみをご期待だった方々、まことに申し訳ありません。

## 忠犬 vs 天 始まり始まり

昨日の告白から一子が俺に甘えてくるようになった。

まあ、簡単なもので言つと俺が座ると必ず膝の上に座ってくるだとか飯を食う時にあぐらしてしてくるだとか

そんなことぐらいなんだけどな。

修行についての手加減はしてない。

そこは一子もメリハリをつけてきっちりやっている。

「よし一子、明日に備えて今日は終わりだ。家に帰るぞ」

明日は恐らく……いや、確実に激戦になるだろう。

なんせあの人は強い人だからな。

「ふあい、お疲れ様でした」

よほど疲れたのかトトトと千鳥足でこっちへ向かってくる。

ポスンッ

そのまま一子は俺の胸に寄りかかってきた。

「今日もよく頑張ったな」

頭を撫でてやると嬉しそうに「えへへ／＼／」と笑う一子

「桐生さ〜ん、私今日はお肉が良い〜」

「うし、ならちよっと待ってな」

俺は一子を抱き上げて家へと戻るのであった。

〜翌日〜

俺は川神から離れた土地

海の上に浮かぶとある無名の孤島に来ていた

「ねえ桐生さん？」

「なんだい一子？」

「いつも言ってるけどここ最近の、特に十人目から相手が厳しすぎじゃありませんか？」

一子の目の前にいる今回の相手、それは

「へっへっへ、一子ちゃんよ。俺あ手加減なんかしないぜ？」

釈迦堂さんだった。

「弱気になるな一子、勝つんだ」

「うん、でもね桐生さん。あの人がお姉様の前とかだったらわかるけどまだまだよね？ あの人、今はやめさせられちゃったけど元・川神院師範代だからね？」

「気にするな、そんなもの気のせいだ」

「そうだぜ、そんなもの気のせいだ」

「嘘だつ！ え？ 真剣で釈迦堂さんが相手なの！？」

慌てふためく一子

ああ、可愛いなあ……

「安心しな、俺がやっても良いんだが今回は俺の弟子と闘ってもら  
うぜ」

「は〜い、初めまして〜一子ちゃん。そしてお久しぶりだね、桐生  
さん」

後ろからやってきたのはよく多馬川の河川敷で一緒に昼寝している友

板垣辰子である。

「今日はうちの妹がよろしくね」

「え？ あなたでもないの？」

これは俺も予想外だ、釈迦堂さんが今、うちの弟子で一番強い奴を

戦わせるって言うてきたのに。

辰子は大体…百代よりも少し弱いぐらい。

これより上がいるのか？

「ああ……お前さんの言いたいこともわかるぜ。確かに実力は辰子のほうが上だけど“今”のあいつには正直俺ですら勝てるか危ういんだぜ」

いったいどんなやつだよ……

そう思っただけ待っていると突然一子が唸り声を上げて薙刀を構えて釈迦さんのほうに威嚇の声を出す。

「ど、どうしたんだよ一子」

なにがここまでこいつをこっするんだ。

気になって俺も一子の視線を追いかけると

「……………なんじゃありゃあ」

竜兵に羽交い絞めにされ、亜巳さんに縄でグルグルに身体を縛られ、犬歯をむき出しにしてこちらを威嚇してくる天がいた。

その体からは黒いなにかが出ていて、俺ですらビビってしまっようなオーラを出している。

見たところ例の薬はやってないみたいだな。

だけでもなんでだろうか

目の瞳孔が開いていて、今にも殺しに掛かってきそうなくらいだ。

一方で一子も負けていない

「ちょ、落ち着けてば」

「グルルルルルルルル！」

だめだこりゃ

「釈迦堂さん、始めてもいいですか!？」

「お、おう。てか早く始めてくれ!！」

こうして、獣vs獣の戦いは始まった。

忠犬vs天 始まり始まり (後書き)

天使(バーサーカーver)の登場www

実力は本編にてお送りしていきたいとおもっております

次回は二人の野獣が戦いを加速させていただきます。

## 一子の覚醒（前書き）

気になったけれども台本形式の文ってそんなに嫌われてるんですかね？

そんなことよりも更新です。

ただいま午前2時46分です

一子ルートに入っておりますが、イチャつくのはまた今度

実は番外編でも作ってそこでイチャイチャを書こうかと思っております。

でも本編と同時並行でイチャつかせたい自分も居ます。

だから、とりあえずは川神院の試練が終わってからでも良いですかね？

## 一子の覚醒

「ぶるあああああああああ！！！」

「ぐるあああああああああ！！！」

現在、板垣一家と釈迦堂さんと俺は冷や汗全開で“上空で”行なわれている戦いを見ていた。

ここが本当に川神市じゃなくてよかった。

そう、ここは九鬼家が所有している離島

島全体に釈迦堂さんの結界が張ってあって戦闘の気が島の外に漏れないようにしている。

「……………なあ、桐生君よ」

「……………なんすか、釈迦堂さん」

「俺、あいつらの動きがたまに見えなくなるんだけど」

「奇遇ですね、俺もちよくちよく見失います」

戦闘が始まって数分、一子と天の戦いは正直言って凄まじいの一言に尽きる

薙刀とゴルフバットが火花を上げながら打ち合っている。

その動きは俺や釈迦堂さんですら目で追うのがやっとのことだ。

てか二人とも、なぜにそんなに荒ぶってる？

二人から感じられる気は獣そのもの

しかも釈迦堂さんのよりも本能に忠実に、理性の欠片も感じさせられない。

「亜巳姉、あの二人が怖いと思った俺は間違ってるねえよな？」

「うん、私も同感」

「安心しな、あんたら二人は間違ってるんじゃないよ」

板垣一家も涙目である。

「……………なあ、桐生君よ」

「……………なんすか、釈迦堂さん」

「なんかあの二人の気が更に膨れ上がってるんだけど？」

「そうっすか、俺としてはあの二人の攻撃が常に鉄心さんの毘沙門天ぐらいの速さだっことに驚いてるんですけども」

あれだよ、この状態だった百代はおるか俺ですら相手になんないからね？

「テメエエエエエエ！　なに桐生の弟子なんかやってやがんだよ！

「！」

「うるさいわねえ！ 嫉妬してるんじゃないわよ！！」

「お前を倒して、私が桐生の弟子になる！！ そして」

「させないわ、私がこの勝負に勝つ！ そして」

そこで、激しい……激しすぎる打ち合いからいったん距離を取る二人

「私が桐生（なまこ）の一番近い場所に居るんだああああ！！！！」

二人の膨れ上がった気が更に膨れ上がって

「秘技・我流決戦奥義」

「特式・奥ノ型」

「八大竜王剛力斬！！」

「黒式金剛夜叉八方迅！！」

八匹の竜を纏めていると言われている竜王とまるで阿修羅の如きお面の人のオーラが見える。

その二つが衝突し、一子と天もまた激突していた。

「……なあ、桐生君よ」

「……なんすか、釈迦堂さん」

「完全にお前が原因じゃねえの？」

「冷や汗が止まらない」

待てよ、じゃあ揚羽と一子も戦うことになんのか？

いかん、いかんぞ！！

どうしよう、猛烈に一子を育てることをやめたくなった。

「絶対に、絶対に退くもんですか！　こんなところで私の夢を諦められない！…！」

一子さんや……

そうだよな、俺はなんてことを思ってしまったんだ。

一子は川神院の師範代になって、百代を支え、さらには俺や鉄心の爺さんを超えるつもりだったんだよな。

それなのに俺は……自分が恥ずかしくな「勝って思い切り桐生さんに褒めてもらうんだ！」「恥ずかしくなんてならない。

夢それ！？

良いよ、褒めてやるよ。

いくらでも撫でてやるよ。

むしろこんな戦いを繰り広げるなんて俺ですら難しいんだからね！？

すごく帰りたくなってきた自分であった。

side out

三人称 side

九鬼家所有離島空中二大決戦

忠犬 vs 天

その戦いは凄まじすぎるのであった。

お互いに自分の実力の三倍以上の力を発揮していた。

体内で活性化する気の種類は川神百代が使う瞬間回復には及ばなくても身体能力強化という面では百代を超えるほどである。

それを可能とした理由は幾つかある。

一つは互いに“動”の気の持ち主であるからだ。

気には二つの種類があると言われている

“静”と“動”

静はいわば柔なる気

自らの気を静め、まるで流れる水の如く戦う

一方で動の気は剛の気

瞬間的に気を爆発させて、それこそ獣の如く圧倒的な猛攻を繰り出す

しかしこの二人はここで荒業に出た。

瞬間的な爆発ではなく、常時気を爆発させて戦うことに出た。

身体的な負担は尋常ではない。

しかし二人にも退けない理由があった。

それは単純明快

『桐生の近くにいる女は私一人だけだ』

これだけ、そうこれだけの理由だ。

互いに獣的な部分も弱くはない、縄張り意識的なものが二人を更に荒ぶらせる。

すれ違いざまに一撃

更に振り向き様にも一撃

弾かれた勢いを利用して更に一撃

それも弾かれ、反動を利用した一撃

一撃、更に一撃

全ての一撃が全力

フェイントなどは無意味

その一瞬の隙でやられることは明白

互いに全力を持って、力で勝しかないのだ。

それが獣

これこそが獣の戦い

互いの獲物がぶつかる度に発散する気で傷が出来る

両者の力量は互角、ゆえに持久戦で決着がつく

この戦いを見ている全員がそれをわかっていた。

決着の時を見逃さんと、観客は一瞬足りとも目を離さず

戦う者は刹那の好機を見失わないように、全力を尽くすのであった。

side out

一子side

この時、私は感じていた。

より深みへと落ちていく

武の、獣の、さらに深みへと落ちて行く。

川神院で獣にはなっってはいけないと言われていた。

事実、川神院の元師範代である釈迦堂も獣であったがゆえに追放されたのだ。

己が目指すは川神院師範代

しかし、今、己は獣への絶壁を急降下で落ちている。

同時に武の深みへとも落ちていく。

「ゼヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

私は今まで勘違いしていたのだ。

お姉様やお爺ちゃんみたいに武の頂点に立つには己を律して獣を抑えなければいけない。

お姉様のあれは獣と言うよりも武人としての本能だ。

みんな、それが分かっているからお姉様は憧れられるのだろう。

そう、だからこそ私は勘違い……いいえ、間違っていたの。

今ならわかる

“私にはお姉様やお爺様の横に立つのは無理だって”

だってあの人たちは“頂点”に居るのだから。

私ももちろんそこを目指していたわ。

けどもね、私はそっち側の人間じゃない。

“武人”を頂点とするのなら私はその逆の底辺に居る存在

目の前のこの女の子や釈迦堂さんや桐生さん達と同じ

“獣”なのよ

力を求め、より強い相手と戦い、本能のままに戦う

それこそが私の、私達の在り方

頂点に上り詰めるのではなくて底辺へと落ちきる

理性と本能

その理性を捨てなさい川神一子

戦うのに理性なんていらぬ

本能がすべて

獣に考えは必要ない

身を委ねなさい

より深みへと、深淵のさらに奥の深淵へと落ちていくの

「ガ、グルルル

」

ああ、なんてこの闇の奥底は、この深淵の更に底にある深淵は

ココチヨイノダロウカ

「lshv・カDsんzvカdvhb¥s:おvkzdんvb¥  
ds・xvzb¥dslんxbv;¥dxkz。vん;¥dsxl  
knbvzdlx。vknb¥ldkxvん¥;dx。fkvbll  
kdzx。vbkzd、bjxvllzds、xvb・llzds、v  
blkz。dsvん; s¥dbcskb!!--」

この日、私の理性は完全に吹き飛び、私は獣と成り下がった。

side out



## 一子の覚醒（後書き）

あわわ、一子が大変なことになっちまった。

キャラは崩したくないけどもやっちまったZ E

ちなみにですけどもこの獣状態は戦闘の時のみです

さてと、ここで少し技についての紹介です。

### 【八大竜王剛力斬】

一子の技です、奥義です

日本には八匹の竜が居ます

青竜、神竜、黄竜、黒竜、赤竜、白竜、蛇竜、応竜

実はもつといるのですがここであげるのはこの八匹です

そしてこの竜をまとめているのが八大竜王と呼ばれる竜のことです。

その力を鉄心の様に気で具現化し、力を剛の気で薙刀に纏わせて斬りつけるというなんとも力技www

一子の奥義の一つです

### 【黒式金剛夜叉八方迅】

これは金剛夜叉といえ、姿が想像がつくでしょうか。

姿の説明は省かせていただきます

ようするに先に述べた八大竜王のようなものです

違うのは【八方迅】という点

決して八方陣ではないです

これは天が独学で身に着けた技で、本来ならば八方から疾風迅雷の如く、具現化させた金剛夜叉の一太刀を八回も与えるというチート技

具現化した姿はブリーチの狛村隊長の卍解を参考にしてください。

まだまだ、未熟が故に武器にその力を宿して一撃を加えることしか出来ません。  
ゴルフバット

これからご期待をwww

では、こちらへんで。

皆さん、またの更新をお待ちください

## 壊れた一子（前書き）

ただいま、午前04：56分です。

サブタイ通り、今回の一子は壊れて狂っています。

一子ファンの方は申し訳ありません。

幻滅するかもしれませんが、それでも良かったら本編をどうぞ

## 壊れた一子

「かかか、なんだあ、おい！ 良いじゃねえの一子ちゃんよあ！！」  
隣で釈迦堂さんが狂ったように歓喜の声を上げる。

「くくく、桐生よあ！ お前、これがわかって俺か辰子と闘わせようとしてたんだろ！？」

「まさか、こんなこと予想外でしたよ」

「冗談が下手だねえ、顔が思いつきり笑ってるぜ！！」

釈迦堂さんのハイテンションの理由もわからなくはない。

「正解ですよ。一子はこちら側の人間だ、本当なら辰子と闘わせて覚醒してもらって予定だったけど結果的に良い方に転がった」

「なにが良い方だよ、俺達の場合は悪くなりすぎた結果だろうが」

「違うない」

俺は肩を竦めて笑う。

ようやくだ、ようやくお前は扉を開けることが出来た。

さあ、深淵の奥深くに位置する深淵

まだそこは始まりだ。

ここまで堕ちて来い一子、共にこの闇へと浸りきるうじゃないか。

一子 s i d e

頭がポーツとしてきた。

私は何をしてたんだっけ？

「おらあああ！」

なにかが五月蠅いわ。

視界が段々暗くなってくる。

ガキンッ

金属音がした、それと同時に私が持つてる薙刀に重い衝撃が伝わってくる。

視界が真っ暗になった。

薙刀を振るう。

ガキキンッ

また金属音

なにかに当たったみたい。

匂いが分からなくなってきた。

嫌な感覚がしたから私は頭を横に傾けた。

すると、なにかがさっきまで頭があつた場所を通つたのを感じる。

匂いが一切しなくなった。

薙刀を振るう。

なんで振るってるんだっけ？

口の中が切れて血の味がする。

どうして私の口の中が切れてるの？

血の味がしなくなった。

そう言えば、私って空に浮いてるみたい。

冷たい風が火照つた体に吹いてくる。

肌で風を感じられなくなった。

さっきまであつた痛みも感じない。

「

！」

なにか耳障りな声が聞こえてくる





そこにはなぜか腹を抑えて、苦しそうにしている女の子が居た。

「アハッ」

そうだった、なんで私がここに居るか思い出した。

「アハハ、いただきます」

そうだ、この餌を綺麗に食べて、桐生さんに褒めてもらうんだ。

「ぐらあああああ」

餌が苦しそうにしながらも襲い掛かってくる。

ゴルフバットを思い切り上段から振り下ろしてきた。

ガゴンッ!!

思い切りそれを私は頭で受けた

「……………あっ」

絶頂っちゃた、なに今の？

最高よ、最高よ最高よ最高よ!!

ジョロロロロロ

私の股から、絶頂した証拠の液体が流れ落ちる

「気持ちいい」

絶頂せてくれたお返しに私も薙刀で切り返してあげる。

すると餌の胸に一筋の線が入って、パカッと綺麗な花が咲いた。

「

!？」

アハハ、絶頂した？ 絶頂した？ 絶頂した!？」

全身に深紅のシャワーを浴びる

「熱っっい」

肌が焼けるんじゃないかってぐらいに熱い

どうしよう、また絶頂っちゃた。

音を立てながら漏らしていく。

もっと、もっと私を絶頂せて

だから私は墜落していく餌にもう一度斬りかかろうとしたら

「そこまでだ、一子」

桐生さんが現れて、腕を掴まれた

side out

「そこまでだ、一子」

俺は追撃をかけようとした一子の腕を掴んで止めた。

この状態、深淵の獣になりたての症状だ。

痛み、狂気、苦しみ、血

様々なものが快楽に感じる

釈迦堂さんも一子が絶頂ったあたりで、止めにかかろうとしていたしな。

「桐生さんだ」

薙刀を放って、甘ったるい声をしながら俺に体を擦りつけてくる一子

「桐生さん、桐生さん」

ゆっくりと降下しながら俺を上目使いで見てる

「私ね、三回も絶頂したの」

「そうか」

「餌は少し食べ残しちゃったけどもちゃんと食べたよ」

「偉いぞ、一子」

獣になりたてはなにを言っても無駄だ。

ここで一子の行動したことを否定するとトドメを刺しに行きかねない。

幸い、相手はかすり傷程度だし大事はないだろう。

てか、かすり傷であそこまで血が出るとはやはり“動”の気を活性化させすぎていたからか。

「だからね、ね、御褒美をちょうだい」

俺はチラリと釈迦堂さん達の方を見る

すると釈迦堂さん達も事情はわかっているのか、行けと言ってくれた。

ありがとうえ

さて、これからやることとしてまずは一子を満足させてからこの状態に慣れさせないとな。

壊れた一子（後書き）

次の話はどんな風な話を書こうかな？

## 閑話（前書き）

ただいま22：09分です。

今回は題名通りの閑話です。

コラボしてくださった鯉庵様、ありがとうございます。

楚良くんの出番は今回は少ないですけどもいずれかは出したいと思っております。

では、お楽しみください。

## 閑話

一子side

目が覚めるとベッドの中で目の前には知らない天井があった

嘘です、桐生さんの家の天井だ

「なんで私……………」

確かあの女の子と闘ってて

「っ!?!?」

そっだ、あの闇の中で私は

思い出すだけで身体が火照ってくる

「別にお前が盛って快楽を求めるのは構わないけど今はやめておけ」  
額をトンツと抑えられる

「……………ツ!?!?」

瞬間、全身に電気が走った

「ギヤアアアアアア! 痛い!」

なにこれ!?!?

凄く痛いんだけども

「当たり前だ、初めての墮ちでケモノの領域を突破して獣<sup>ケモノ</sup>まで届こうとしていたんだ」

この痛みの原因である桐生さんの声が見た方を見る

桐生さんは私のすぐ隣で裸で横になっていた

「ななな!!」

「とりあえず落ち着け。お前、覚えてないのか？」

え〜と………確か、私が闇の中で身を委ねて、あの女の子を倒して

火照りが収まらなかった私は

思い出した途端、顔が真っ赤になったのが分かった

「俺としてはあんなエロい一子も好きだったぞ」

「でもあれは私じゃ、ん、ちゅぱ、くちゅ、ちゅ」

強引に私の唇を奪われた

「ぶはっ、まったくまだまだだな」

やれやれと言った風に肩を竦める桐生さん

「良いか？ お前が居る場所はまだ浅い場所だ、だからまだ分からんかもしれないけどな」

そこで一旦言葉を区切って

「お前は今まで生きてきた世界を憎んでいたろ？」

桐生さんと同じく裸の私の身体を満遍なく愛撫してくる

「ならば決してケモノなんていう中途半端な存在になるな、ケダモノ獣になれ」

全身の筋肉痛は次第に消えて心地よい快樂が全身を包んでいく

「眠れ、そして己が深層へと逝き、獣を知ってくるんだ」

私はそれを最後に、眠りについた。

凍えるように冷たいなにかが私を包み込む

でもそれは同時に芯から燃え上がるような暖かさがある

「どう？ 最高の気分になれるでしょ」

目の前にはもう一人の私が居た

「やっと会えたわね、私はずっと貴女を見てた」

ニヤリツと笑ってその場に胡座で座り、私も座る

「そうね…貴女のごことは全部知ってるから私のことを話しましょうか」

良いわ、聞こうじゃないの貴女の全てを

Side out

寝たか

恐らく今、一子は獣と出会っているはずだ

俺は一子の頭を少しだけ撫でて立ち上がり服を着る

時間は深夜一時

「ったく、こんな時間にそんな殺気を出すんじゃないやねえよ」

家の外にでるとそこには一人の男が居た

「ああ？ 誰だテメエは…こっちはババアにつまらねえ仕事させられてムカついてんだ」

「おいおい、人様の玄関前で殺気を蒔いておいて逆ギレかよ」

「悪魔がお前の家に入りこもつとしたから助けてやったんだよ」

悪魔だ？

ああ、こいつ頭に蛆が湧いてる人か

なんか俺らと似てる気配がしてるんだけどな

「ふ〜ん、悪魔ねえ」

俺は頭を掻きながら面倒くさそうに言う

「で、あんたはその悪魔とやらを殺す為に俺の家の前で殺気を放つてたのか？」

「そうだが？ それと俺の名前は楚良だ」

名前なんてどうでもいいが

なるほどなるほど、理解したぜ

「お前、喰っちまうぞ？」

久しぶりにアイツも出たがってるしな

「ぷっ、ハハハ！ お前もケダモノかよ！？ しかも『逸脱』しかけてやがる……いいや、ちよいと違うみたいだな」

「カカカ、そうだが、違えよ。俺は獣ケダモノなんだよ」

さてと、さっさと喰らうか。

俺は一子の目覚めを側で待たなきゃいけないしな。

「死ねよ、糞豚」

「お前がだろ、糞虫」

共にまったく同時に出した足が交差して、クレーターができた。

そしてこれが獣vsケダモノの幕開けであった。

一子side

目が覚めると私はすぐさま闘気を感じ取った

結界が張ってあるみたいだけでもこの距離じゃ流石に気づくわ。

服を急いで着替えて私は玄関を勢いよく飛び出て薙刀を構えた。

「ん？ なんだ起きちまったのか一子」

ゾクリッ

その声を聞いた瞬間、背筋が凍った。

「桐生………さん？」

目の前には額から血を流している桐生さんが居た。

後ろの道路は戦闘の形跡らしく、コンクリートが何か所もクレーターが出来ていて、道や壁には抉られて何本もの、まるで大蛇が通っ

たのような模様ができていた。

「さっきの戦闘で体が火照っちまってる、一子、相手になってくれ」

「え、あ、はい」

なんか知らないけども、やったわ。

「今度会ったら間違いなく喰らいつくしてやるからな、あの野郎」

そんな桐生さんの咳きは気にせずには私はこの後、どうメチャクチャにされてしまうのかで頭が一杯だったのだ。

s i d e o u t

閑話（後書き）

一週間ぶりか、話がまったく浮かばねえな。

ちゃんと考えなきゃな。

一子、山籠もりすることのこと（前書き）

お久さです

ただいま18：57分

今回から二、三話は山籠もり編です。

そしたらいよいよ……

では、お楽しみください

一子、山籠もりするとのこと

昨日のあの野郎、楚良とか言ったか？

なかなか強敵だった。

おそらくは向こうも本気ではなかっただろうし、次に戦うときは俺も覚悟せねばなるまいな。

そんなことよりもだ。

「ねえ桐生さん」

「なんだよ一子」

俺達は現在、愛車のバイクに乗ってとある山へと目指していた。

「百人抜きは良いの？」

「……………一旦中断だ」

この前のあの戦い、俺の計画から大きく離れた結果となった。

俺の予想ではあそこまでの成長は考えてなかったもので、対戦相手に狂いが生じた。

もしも次に戦うとしたら釈迦堂さん

でもあの人とやるんだったら、百代との戦いに響くような戦いにな

つてしまつかもしれない。

武人との戦いではなく、ケダモノと闘うということは本気で覚悟が  
いる

最悪、死んでも仕方がないのだしな。

そうこう考えていると、俺達は目的の山へとついた

「試練まで残り一週間、俺らはこの山に籠る」

ここからは武人の立ち入る領域ではない。

「川神流には薙刀の奥義として『罅』というものがある」

「罅？」

「そうだ、上下に薙刀を超高速で振ると言うだけの簡単だがそれゆ  
えに強力な技だ」

一子は気の具現化や放出などはできない、だからこそ身体能力の上  
昇などに全力で気を注げる。

それはつまり、単純な技ほど威力が高くなるのではという可能性が  
あるということ。

「これから行う修行は獣状態での戦闘      ようするに俺達の奥義  
を教えてやる」

その過程で罅は重要な技だ。



話を聞き終わった一子の瞳には燃え上がる業火が宿っていた。

ふふふ、楽しみだ。

こうして、俺らの修行は始まったのであった。

一子、山籠もりするとのこと（後書き）

この前、マジ恋Sのサイト見てたら

俺ってばマルギツテさんと誕生日一緒なんですよ!!!

これって運命じゃね？

マルギツテは俺の嫁、異論は認めないWWW

## 一週間前（前書き）

もうすぐ、山場は終わりです。

百代との決闘の後にはしばらくイチャイチャを書いて、その後には次のヒロインの話に入りたいと思っています。

次のヒロインは前に行ったアンケートを参考にしますが、これといった人物が居ましたらドシドシメッセージが感想で教えてください。

## 一週間前

川神院 side

「……一子の行方はわからずじまいか」

試験まで残り一週間、いまだに行方が判明していない。

逃げた…それは絶対にありえんか。

桐生の下で修業をしているようじゃが、あの一子ではあそこからどう頑張ろうとも無理じゃろう。

なんせ相手は百代じゃ。

体調を少し崩しているワシじゃが、誰にも負ける気はせん。

じゃが百代が相手ならばそれなりの覚悟は必要

それこそワシの命を懸けてるぐらいじゃ。

一方で一子は気の具現化を使わず……いや、川神流奥義を使わなくても一瞬で片をつけられる。

差は明らか、天と地ほども離れておる。

「ジジイ、なんかならんのかな？」

「ワシも身内としてならなんとかしてやりたいがの、ここは川神院

なのじゃ  
「

武のプロフェッショナルとして手加減など許されん。

身内だからと言って合格させたのでは意味がない。

「だがな、ワン子は努力をし、強くなった」

「じゃが、それでもなんじゃ」

「だよなあ」

「うむ」

百代とワシは頭を抱える

これからワシらはこの思い罪悪感を抱え続けねばならぬのか。

それも運命なのか。

side out

一子side

「お疲れさ〜ん、今日はここまでだ」

「お、お疲れ様でした〜」

よ、ようやく終わったわ。

修行が始まって二日目、身体は既に悲鳴をあげていた。

獣状態になるとすべての身体機能が上がる。

まだまだ身体に負担が掛かるし、獣状態から戻った後の疲労感がありえないほど半端ない。

「桐生さん抱っこして〜」

「ははは、良いぞ」

そう言って私をお姫様抱っこしてくれる。

えへへ、やっぱり桐生さんの腕の中は暖かいや。

体を丸めて桐生さんの胸に顔を埋める。

「この甘えん坊め」

「良いじゃない、桐生さんだって嫌じゃないでしょ？」

「まあな」

この人は不思議

私と同じ…ううん、私よりも釈迦堂さんよりも深く暗い場所に居るはずなのに輝いている。

それは濁った光

汚れば汚れるほどに輝きは増して行き、目がくらんでしまいくらいになる。

だからこそ私はこの人に惹かれた。

多分、揚羽さんもそう。

結果的に私の方が桐生さん選ばれたけど、まだ私と揚羽さんの決着はついていない。

お姉様よりも先か、それとも後か

どちらにしても、決着を付けなければならぬ。

考えれば考える程に鬱になりそう。

でも、こんなことで挫けてたらいけないわ。だけでも怒り狂った揚羽さんを少し想像してみた。

……修行もつと頑張らなきゃ。

s i d e o u t

一子は頑張っている。

この一週間で、実力は百代よりも少し上ぐらいにはなっただろう。

しかし、それでは駄目なんだ。

となりで俺に抱きつきながらスヤスヤと眠る一子の頭を撫でる。

少し実力が上程度では負けてしまう。

百代には瞬間回復があり、長期戦になれば不利

ただでさえ獣状態は体力を使うのだ。

こちらも瞬間回復を使えば話は違っただろうが生憎と技を習得する時間はない。

てか俺も使えそうになさそうな技だし、教えられない。

だからこそ、俺は一抹の不安がぬぐえない。

負けるとは思っていないが、勝てるのかと言われれば困る

「負けるな一子、もしもの時は川神魂を思い出せ」

そう、あれは俺が作り上げた詩

「光灯る街に背を向け、我が歩むは果てなき荒野」

それは孤独で辛い旅

「奇跡も無く標も無く、ただ夜が広がるのみ」

絶望を抱き、悲しみに暮れ、挫けてしまいそうになる。

「揺るぎない意志を糧として、闇の旅を進んでいく」

「ただ、それでも」と自らを奮い立たせて一歩、また一歩と進んで行かなければならない。

世界の理不尽さにも必死に歯を食いしばりながらも、どれだけ重いものを背負っていても

決して…決して、挫けずに歩き続けなければならない。

「だからこそ、俺はお前を信じ続けよう。頑張れよ一子」

決戦の日は近い

一週間前(後書き)

次回、いよいよ決戦の日です

開幕（前書き）

いよいよ、決戦か……

よろしい、ならば戦争だ。

## 開幕

語りside

「……………」

「……………」

まだ日も出てきていない時間

とある山奥で一人の少年と少女が川辺で座り、向かい合っていた。

「夜が明けたら、いよいよ決戦の日だ」

少女は少年の話しを聞きながら、この数ヶ月のことを思い出していた。

93人の猛者達

最初の数人ですら短期決戦に持ち込まねばやられていたかもしれない。

どれも気が抜けない相手ばかりであった。

目を閉じれば一人一人の顔を思い出せる。

「数多の猛者を蹴散らし、より深みへとお前は登ってきた」

深淵へと落ちれば落ちるほど、より高みへ登っていくという矛盾

少女は強さを求める結果、人ではなく獣ケタモノに成り下がった

「そしてもうすぐ“94人目”の猛者とやることになる」

少年の言葉の意味を理解したのか少女はニヤリと笑う

「お前は糧を喰らい、僅か数ヶ月で百代クラスの領域まで力を付けた……だがそんなところがお前の終わりではないはずだ」

「……………はい」

静かに、それでいて力強く頷く

「答える、お前は何を求める？」

少年のその言葉に少女は即答した

「力を……憧れを越え、さらに先へと進むための力を！！」

勇往邁進

例え、どんな困難があろうとも負けずに挫けずに前に進み続けなければならぬ

「よろしい」

少年は少女の言葉に満足したかのように笑顔になり、一つの詩を口

にした

「光灯る街に背を向け、我が歩むは果てなき荒野

奇跡も無く標も無く、ただ夜の闇が広がるのみ

揺るぎない意思を糧として、闇の旅を進んでいく」

地平線の彼方から日が見え始めると同時に少年は立ち上がった。

「さあ、百人抜き94人目 川神百代を倒しに行くぞ！」

「はい!!」

Side out

川神院 side

一子の試練は昼から始まことになっている。

本来ならば川神院の試験のため、サポーター以外は応援にこれないのだが今回は本人の強い希望もあり特別に観客をありにした。

と言っても風間ファミリーと英雄とあずみ、それから源ぐらいしか現在、来ていない。

時刻は11時55分

あと五分で時間にも関わらず、未だに一子と桐生は現れていなかった。

「なんだあ？ 一子ちゃんは来てないじゃねえか」

そして、一子たちの代わりにやって来たのは釈迦堂であった。

「釈迦堂、なんでここにキタ？」

「今日は観客ありなんだろ？ そう睨むなって、一子ちゃんの試験を妨害する気で来たわけじゃねえから」

釈迦堂のその言葉にルーは疑問を持った

いや、正確には釈迦堂自体に疑問を持った

この男からいつも感じる戦闘への気を感じられないからだ

「観客席からじっくりと見させてもらうさ」

そう言って観客席へと向かう釈迦堂

なにが釈迦堂にあつたのか不思議でしょうがないルーであったが今はそれよりも一子の方が大切であった。

釈迦堂と話しをしている間に残り一分までに迫った。

道場に鉄心と百代が訪れる。

「この気は桐生さんの……どうやら来たようだな」

「うむ、時間丁度じゃわい」

百代と鉄心が見つめる先

そこには桐生と愛しの家族、一子が居た。

その姿を見た瞬間、鉄心、百代、ルーの三人は失望した。

一子の全身からにじみ出る気で、強さが“まったく変わっていない”ことだ

観客席を守るための結界を維持している師範代候補生たちやこの戦いを見守るために来ていた師範代クラスの人間、風間ファミリーの武士娘たちですらもそれに気づき、絶望を隠せずにした。

「西方 川神一子！」

「はい！」

審判の鉄心が名乗りを上げて、それに元気よく答える一子

「東方 川神百代！」

「……………ああ」

せめて、せめて“全力全開”真剣の一撃を食らわせて実力の差を教えなければならぬ。

「今回の試験では、百代と戦って川神院師範代としての十分な実力が判断できれば合格じゃ」

合格条件を告げ、この場が静寂に包まれ、緊張が場を支配していく。

百代は構え、一撃で決めるつもりであった。

対する一子はいくまでもいつも通りの構えであった。

「それでは……………始めっ！」

「川神流奥義、無双正拳突き！」

開始と同時に放つ川神流の奥義、誰もが終わったと思ったと確信していた　　が、

その一撃を下から払い上げ、ほんの一瞬だけ出来た隙に刷り上げたままの薙刀が振り下ろされた。

「川神流奥義、罅」

その刃は百代に食い込み、百代を吹き飛ばした。

吹き飛ばされた百代は二、三回転して地面に俯せに倒れた。

そのことに反応できたものは二人だけ

師匠でもある桐生とその強さを既に知っていた釈迦堂だけであった。

クルクルと薙刀を回して、柄尻で床を叩く。

「起きなさい、川神百代」

静かに、そう呟く一子

再び薙刀を構えて倒れている百代を睨みつけながら微笑む

「言っておくけども、あまり舐めてかかってこないことをお勧めしてあげるわ」

こうして、幕は落とされた。

s i d e o u t

開幕（後書き）

さあ、これから続きを考えなきゃな!!

## 幕開け（前書き）

短い、戦闘風景がうまく浮かばないから今回は一子のターン

## 幕開け

一子side

ふふふ、みんな驚いているわね。

直接見てはいないけども周りの気でわかる。

釈迦堂さんと桐生さんは驚いていないみたいだけど……

ゆっくりと起き上がる川神百代

「今は決闘中、そんなゆっくりで私を舐めてるの？」

だから私は起き上がろうとしている川神百代の顔に罵を喰らわす。

「があっ!?!」

一度かち上げられた顔面は高速で振り下ろした一太刀で叩きつける。

「川神流奥義、地の剣!」

さらにもう一度叩きつけ

「これはだめ押しよ」

全体重を乗せて踏みつけた

いそいで距離をとる私

顔を叩きつけた地面にはクレーターが出来ているけども詰めが甘かったわね

これぐらいじゃあ気絶しないはずだ

予想通り川神百代は起き上がった

その顔は困惑していたが

「ワン子、お前はどんん」

話の途中で一気に距離を詰める

横から首を狙った一線

それを腕でガードしようとしている川神百代

「見よう見まね、白刃の大蛇！」

一番、私が気に入っている技

使い勝手が良く、これがなかったら今まで私は勝ち続けられなかったかもしれない

そしてそれは川神百代も例外なく意表を付かれた

「ぶふあ！」

ガードを避けて首に一太刀入る

相手にとってはガードをすり抜けたように見えているはず  
振り抜いた勢いを利用して腹に回し蹴りを入れる。

だけでもそれは防がれてしまい、蹴った反動で跳び退く

「お前……本当にワン子なのか？」

「ええ、正真正銘の川神一子よ」

だからその驚いている顔はムカつくわ

「私はここに“川神院師範代”の候補として来ている。この程度のこと出来て当たり前じゃない」

そう私が言つと川神百代は目を瞑って気持ちを落ち着け始めた

「よし、ならばこちらも本気で闘おうそんな覚悟は戦いが始まる前に決めておきなさいよ」「」

喉元を柄尻で突いて、怯んだところに一撃を喰らわす

「川神流奥義、大車輪！」

本日で三度目、川神百代は後ろに吹き飛んだ

その姿を私はつまらなく見つめる

「いい加減にしてちょうだい、退屈すぎて“あの子”も出てきたく

ないって言ってるじゃない」

正直言って拍子抜けよ

こんな闘いすぐに終わらせたいぐらい

「調子に乗るなよ川神一子オオオオオ！」

叫び声を上げながら立ち上がる川神百代

「……………アハッ」

ようやく面白くなってきたわね

「掛かっておいでケモノさん、ケタモノ獣になりきれない中途半端な貴女なんかに負けないわよ」

さあ、始めましょう

ここからが本番よ

S i d e o u t

幕開け（後書き）

どうでしたか？

よろしければ感想など、お願いします。

武神、目覚める(前書き)

どうも、今回もかなり短め、でも次回からは長くなる予定です。

このお話から戦いが本格的になっていきます。

## 武神、目覚める

「はあああああああああああ！！」

気合いの声と共に、一気に攻める百代

拳を連続で出し、さながら拳の壁である。

それに対抗して一子も突きの壁を作る。

わずか一秒足らずの攻防、出した手数はおよそ五十以上

相打ちになるや、百代は瞬発性を生かして一子をかく乱する。

それに対して一子は冷静に、同じ速度で移動しながらも百代に斬りかかる。

「ははは、ようやくまともになったわね」

楽しそうな笑顔を浮かべ、高速で闘う二人

「でも、武人としての貴女じゃなきゃ “あの子” は出ようとしな  
いんだけどね」

困ったように呟く一子

「ララララララララララアアアアアアアアア！」

瞬間回復によって疲労を回復させ激しい猛攻を休みなく続ける百代

対して一子はそれらすべてをギリギリのところまで紙一重で避ける。

「遅いわよ、ただ直線的に攻撃してくるだけじゃ私に触れることから敵わない」

百代の拳を舞うように避けつつ、一子は反撃を食らわす。

「妙技・雷皇閃！」

薙刀による高速の連続突き

その数は百代が作るラッシュの壁よりも多かった。

「ぐう……………」

「あはははは！ 情けないわね、ケモノになってもその程度!？」

嬉しそうな声と逆に顔はがっかりしたかのようである。

「確かにこれじゃあ“あの子”も出てきたくなくなるわ。むしろ私が代わってほしいぐらいね」

力技で百代が攻めれば力技でそれを一子は凌駕し

技術で百代が攻めれば技術でそれを一子は凌駕し

全てを凌駕していく。

「ケモノが私に勝てるっても？ いい加減に目覚めなさい“武神”」

自分が挑むは武を極めし武人、神とすら呼ばれるこの女と戦いに来た

「それなのにケモノと戦わされるなんて拍子抜けよ、九撃一閃」

その名の通り、高威力の九撃が百代に入る

「ぐわああああああ！」

もう何度目かわからないが百代は吹き飛ばされる

「ぐ、ガハツ!？」

それにより百代は吐血をして自我を戻したが、同時にあることに気がついた

「く、なにをしたんだ一子!！」

そう、吐血をしたのだ

ダメージと疲労が一瞬で回復するはずの百代が

「大したことじゃないわよ、私はこういう系の技が向いているらしくてね。少し貴女の気を狂わせてもらったわ」

先ほどの九撃で薙刀に気を纏わせ、百代の気の巡りを狂わせた

「これで貴女は迂闊にケモノになれないわ」

理性ではなく破壊衝動と本能で闘うケモノはカウンターを合わせやすい

瞬間回復が使えないのならば、今の一子にはただの木偶の棒同然になるだろう

「これで貴女の絶対的優位は無くなった」

淡々と告げる一子

「油断も慢心もせずに来なさい、貴女は私と同じ土俵に引きずり落とされたのよ」

勝負はここから加速していく

武神、目覚める(後書き)

一子………怖い子!

感想お待ちしております。

## 拮抗の時（前書き）

すみませんでしたあああああ！！

今回、間違えて『ネギま！ その男、孤独の戦士なり』の方に投稿してしまいました。

見てくださった皆様方申し訳ありません。

そして指摘してくださった方々ありがとうございます。

## 拮抗の時

鉄心 side

一子が百代を圧倒していることにワシは驚きを隠せずいた。

才能がなく、努力を重ね続けたが、それが実ることは一生無いと思つておつた。

じゃがこれはなんじゃ？

少し見ない間に一子はきつと想像を絶するような修練を積んだのじやろう。

「よくぞここまで“登ってきた”のう、一子」

ワシは嬉しく思いながら一子の姿を眺めておると桐生がポカンとしてワシを見てきていることに気がついた。

「爺さん、あなたなに言つてやがる？」

「ぬ？ どういう意味じゃ」

特におかしいことは言つておらんが

桐生は首を捻り、少し考えてから納得したような顔で

「いや、じきに意味がわかるさ」

意味深に笑いおつた

Side out

一子side

ヨロヨロと立ち上がる川神百代

「武人として闘う気になつたかしら？」

「ワン子、私はもともと「くどい!」「ッ!」

なにか言いそうになっているが私は怒りを覚えた

私を見つめるその瞳には迷いがあつたから

「貴女は川神流次期総帥でしょ？　ここは川神院なの、武のプロフエッショナルがいつまでもグダグダと言つてるんじゃないわよ!」

ここまで圧倒され、瞬間回復まで潰されたというのにこいつは何を言っているんだ

「何度も言つてるわよね“お姉さま”、私はここに貴女の義妹として来ているんじゃないの」

私は一度でも負けたらこの試練は受けられなかった。

クリスに負けて、私は川神院の師範代クラスの人間がそう話していたのを聞いた

だから私は今まで以上に努力した  
けどその努力はなかなか実らない

そんな時、私の大好きな師匠で兄貴分の桐生さんが帰ってきた

桐生さんは私の修行中、ずっと付きっきりで居てくれて指導してく  
れた

桐生さんの指導能力は異常、的確に欠点と改善方法を瞬時に把握し  
教えてくれる

私の欠点は武人であること

改善方法は武人をやめること

『獣になれ』

そう言われた時、私は歓喜した

確かに川神流では私は武人でなければいけないかった

私の望みは川神百代と川神鉄心を超えること

武人でなければ超えられない二人

獣になるということは堕ちること

私はある意味で夢を諦めることを覚悟した

「貴女が墮ちることない天に輝く極星だというなら私は海底に沈み泥まみれの地星となるう」

結果として私はこの強さを手に入れた

「本気で闘う気が無いなら逃げなさい、本気で闘う気があるなら構えなさい、私は貴女が知る私とは違うのよ」

獣のような獰猛な瞳をしているのかな私？

あの子が居るんだしそうね、きっと。

「……わかった、どうやら私は甘えていたようだな」

川神百代から発せられる気が跳ね上がった。

「行くぞ、一子、ここからは先程までの私と同じにするんじゃない」

「ええ、そのようね」

私が言い終わった次の瞬間、私は薙刀を振るった。

ドゴンッ！

その刃は川神百代の放った蹴りと当たり、相殺された。

「アハッ、相変わらず強い一撃ね」

この手の痺れるような感覚、たまらないわ。

『楽しそうね、羨ましいわ』

私の中のあの子が咳く

代わってほしいかしら？

『ええ、でも別に良いわ。私は第一に貴女とあの人のことが優先なの、世界で私以外で二人だけが重要』

はあ、この子はまったく

『だから暴れて、私の登場はまだまだ先よ』

分かったわよ、なら期待に応えましょうか。

「ふふふ、こっちからも行くわよ」

横一闪、しかしその攻撃は避けられる。

「川神流、無双正拳突き！！」

「ガハアツ！！」

本日一発目の被弾、けどもその一撃が痛い。

吹き飛ぶが空中で体制を立て直して、着地と同時に横に跳ぶ。

着地した場所にクレーターが出来る。

川神百代がそこに踵落しをしたせいだ。

足に気を込めて速さを増す。

「武舞八方陣！！」

数にして21の私の分身が一斉に八方から川神百代に襲い掛かる。

「舐めるなああああああ！」

気弾をまき散らし分身を一斉に打ち消された。

だけど残念、その中に本物は居ないわよ。

「上か！」

上空に気弾を放つ、そこには私の姿が

「残念、下よ」

だけでもそれも分身、下から私は遠心力+腕力で半円に薙刀を振り抜く。

それは正確に川神百代の顎にヒットし、若干宙に浮かせた。

「それぞれそれぞれ！！」

今度は突きではなく斬撃の壁

一応この武器、刃は丸めてるけど気でコーティングしてるから相当

威力があるはずだ。

少しだけとはいえ宙に浮いている川神百代にそれを避ける術はなく、防ぐか被弾かのどちらかのはず

「川神流、星砕き!!」

「ちょ、この距離で!?!」

全力で飛び退き、間一髪で回避をする。

「危ないわね」

「はあああああああああ!」

飛び退いたところへ追撃を仕掛けてくる川神百代

これはちょっと避けられないわね

「ぐおおおおおおおおおお!」

柄で防ぎ、踏ん張ろうとしたが見事に転がされてしまった。

「くう、効く」

ははは、楽しいわね。

さて、ここからどうやってあの武神を引きずり落としましょうか？

私は頭の中でいくつものパターンを想像していくのであった。

s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

拮抗の時（後書き）

ネギま！

の方もよろしくです。

師範代試験く中編く（前書き）

はあ、結局は短くなっちゃった。

前回のあとがきで長くなるとか言ったのにすみませんでした。

それと次期ヒロイン候補のアンケートを行いたいです。

それとももう揚羽さん に行つて速攻で完結させるか

どちらが良いかアンケートしますので感想からお願いします。

## 師範代試験く中編く

三人称 s i d e

川神院の道場の中で高速で動き回る二つの人物がいた。

「はあああああああああああああ!!!」

気合の声と共に数度激突を繰り返す

「ちい、ここにきて鋭さが増してるとは流石にやるわね!!」

「そついうお前こそ先程よりも速くなってるじゃないか!!」

両者、互いに互角の戦いを繰り広げている。

しかし実際はやや百代が有利な状況である。

一子は瞬間回復を封じるために体力と気をその分使った。

一方で瞬間回復を封じられたが武人としての冷静さを取り戻し、十全とは言わないが九割以上の状態から戦うことになった百代

その差は言葉にするよりも短く、実際に思うよりも長い。

「太刀筋は見切った!」

一子の斬激を打ち落とすように拳を合わせる百代

だが一子の一閃は百代の拳に当たる瞬間に曲がる

「白刃の大蛇!!!」

「ぐお!?!」

急に变化した攻撃に対応できずに横腹に一撃をくらう百代

「ハア!」

百代は一撃をくらうと同時に蹴りを入れた

吹き飛びかけるが両者、脚を踏ん張って耐える。

「ほらほら、休む暇はないわよ!」

そこからほとんど間を置かずに跳びかかる一子

一方で百代は反応が少し遅れている。

「ははは、痛みを味わいながら戦うのは慣れてないのかしら!?!」

日頃、瞬間回復で痛みや疲労を一瞬で消し去っている百代

痛みや疲労を抱かえながらの戦闘は数年ぶりであった。

「どつ? 感じる? 絶頂しちゃっ!?!」

一子の猛攻に耐えながら百代はあることに気づきはじめた。

「（一子から感じるオーラが黒い？）」

そう、百代が戦いながら一子から感じているのはいつもの透き通るような気ではなく、ドス黒く禍々しい気

これと同じような気を発する人物を百代は知っていた。

「（これは…… 釈迦堂さん！？ いや、それよりも更に）」

「“お姉様”、一緒にイキまくりましょう」

「一子、お前」

瞬間、百代の視界は暗転するのであった。

side out

外野side

「なん、だよ……あれは」

そう呟いたのはキャップ、そしてそれは釈迦堂を抜いた、この観覧席で見ている人間の全員が思っていることであった。

「釈迦堂、一子のアレはどういうことネ!？」

ルーが声を荒げて釈迦堂を問い詰める

「ほう、まさかここまで堕ちてたとは……くくく、いやあ昔の俺は

人を見る眼が無かったなあ」

釈迦堂はルーのことを気にせず、遠い目をして嬉しそうに、そして悲しそうに呟いた

普段からは想像できないその雰囲気は一瞬だがルーは怯んでしまった。

「まさか……まさかなあ。あの一子ちゃんがここまでになるなんてなあ」

「お前がああしたのではないのか、釈迦堂？」

「違う、キツカケになるようなことは確かにしたがアレは他人がどうこう出来る問題じゃない。アレは自分自身で堕ちなきゃ出てこねえよ」

そう言われルーはもう一度、一子の方を見てから原因となったであろう桐生を睨みつけた。

「桐生、貴様アレはどういうことじゃ！！」

鉄心もルーと同じく桐生に叫ぶ

「なにして……堕ちてるだけだろ？」

「では、なぜ一子は堕とした！」

今にも掴みかからんという勢いで迫る鉄心

「爺さん邪魔だ、試合が見えない」

気だるそうに鉄心を退かそうとする桐生

「話を聞かんか！」

しかし一切動こうとしない鉄心

「“武人”とは己の身体と心を鍛え上げ、身心ともにより高みを目指す存在。戦闘の気に吞まれてしまい戦いだけを求めるようになってしまつてはただのケモノ、貴様は一子をケモノにおとさ。黙れ、川神鉄心」

鉄心の話を遮り桐生は話し出す

「あいつは自分の意思で堕ちようとした、俺はその手助けをしただけだ」

「じゃが貴様が堕ちる切っ掛けになつたのも事実じゃろうが！」

怒りにより徐々に膨れ上がる鉄心の気

「切っ掛け？ ならばそれは貴様ら川神院だろつが」

「……………それはどういふことじゃ？」

「『一子には武術は向いてないから普通の道を歩ませるべきではないか？』 『一子は師範代になれないだろう』 『根本的に師範代になれる人物とは違う』 高校を卒業するまでに武術での試合で一度も

『負けない』、この言葉に言い覚えか聞き覚えはないか？』

「「ッ!？」」

鉄心とルーが息を飲む

これは鉄心、ルー、百代で話し合った内容だ。

師範代たちですら、一子が『高校を卒業するまでに武術での公式な試合で一度でも負けたら師範代試験は受けさせない』としか言っていない。

「いいか？ 一子の心の闇を膨らませ爆発させたのは紛れも無くお前等、川神院の仕業だぞ。そもそも貴様らは一子を裏切ったんだ。

“武人”であれなどと言える立場ではない」

「ワシらは別に裏切ったつもりは」

「貴様らがそういう風に言うのなら俺は追及しないが、少なくとも一子はお前らに裏切られたと思っているよ」

挫折を知らないが故の裏切り、天賦の才を持ち合わせる者には一生分からないであろう苦惱

「良いか、川神院。一子はお前らの考えを遥かに超えて強くなった。……よく見ておけ、あれが貴様らが才能が無いと裏切った者の姿だ」

そう言った桐生の顔はどこか誇らしげで悲しそうだった。

side out

一子 side

戦いは激しさを増していき、段々と私が押され始めてきた

『どうやらキツクなってきたようね？』

私の中の私が話し出す。

『じゃあそろそろ私の力を貸してあげましょう』

ええ、どうやら私だけの力ではここが限界みたいね、頼むわ。

ドゲンツッ！

瞬間、私の心臓の鼓動が跳ね上がる。

「Grrr、GYAOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!」

今ここに、<sup>ケタモノ</sup>獣が覚醒するのであった。

side out

師範代試験〈中編〉（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想をお待ちしております、アンケートのついでに一言とか貰えたら幸いです。

前回のアンケートではメッセージが多かったので今回は感想でお願いいたします。

では次回『獣vs武人』よろしくお願ひします。

## 一子の試練、百代の試練（前書き）

お久しぶりです。

ネタも浮かばないので最近は更新をサボってました。

お待ちいただいていた方々には申し訳ないと思っております。

指摘を受けて『君が主で執事が俺で』という、みなとそふと様のゲームをプレイさせていたきながら揚羽さんの口調を研究中です。

まあ、これ以上は長くなるので本編にどうぞ！！

指摘された部分を訂正いたしました 7月15日現在

## 一子の試練、百代の試練

一子side

私が物心ついたときにはもう孤児院に居た。

そこでは親に捨てられた子供たちが集められていた。

泣き虫だった私はいつも泣いていた。

数年経つと、今度は私はどことも知らない家に引き取られて川神までやってきた。

川神では多くの友達が出来て、家族も温かく、幸せだった。

でも引き取ってくれたお婆ちゃんが死んで、私はお婆ちゃんの親族の家をたらい回しにされるところだったのに川神院が……お姉様が私を養女として引き取ってくれた。

その恩を返す為に私はお姉様の手伝いがしたかった。

過去と決別するために私は武術を始めたんだ。

『それは嘘ね』

気が付くともう一人の私が目の前に立っていた。

『あなたが武術を始めた理由は違うでしょう？』

なにを言っているの？

私が武術を始めた理由はお姉様のことを支えたくて

『初めては本当の親に捨てられた時だった』

その言葉に心臓が跳ね上がる

『次は引き取ってくれた両親が死んで川神院に引き取られた時』

やめなさい、なにを言ってるの？

『あなたはこの世界の理不尽さにいつも振り回されていた』

ああ、そうよ

『それは力がないから、世界は力を持たない者を決して認めず否定し続ける。だから貴方は必死に力を求めた』

結果、一番手っ取り速かったのが川神流の習得

『あなたは決して誰かの為ではなく、自分の復讐のために武術を始めた』

そうよ、私は許せない、この世界が!!

『世界を憎む情熱はいつだって正しい、憎悪の快樂に身を浸しなさい』

瞬間、私の中で何かが切れた。

「Grrr、WAOOOOOOOOOOON!!」

さあ、圧倒的な暴力で復讐を始めましょう。

side out

三人称side

「Grrr、WAOOOOOOOOOOON!!」

試合場の中心で四つん這いになり雄叫びを上げる一子

その姿はまるで狼であり、一子から発せられている気はこの場に居る全員が味わったことのないほどにまで禍々しかった。

そんな一子を見て、観客席の釈迦堂は呟いた。

「ははは、もう笑うしかねえよな」

今にも泣きだしそうな顔で笑う

師匠である桐生は一子のそんな姿を見て呟く

「至ったのか……一子よ」

そして桐生も今にも泣きだしそうな顔だった。

至るとは即ち世界を否定したということ。

至るとは即ち己を墮としたということ。

至るとは即ち自分を否定したということ。

「お前はもう完全な一匹の獣ケダモノだ。俺とも釈迦堂さんとも違う種類のな……」

至るとは即ち

ということ。

「一子……」

同類が故の理解、獣になるという意味

それは言葉にすることも出来ないほどに世界の真理に近づいた真理

二匹の獣は、新たなる獣をそつと見つめるのであった。

side out

戦闘現場 side

百代の目の前で右手に武器を握りながら四つん這いになり唸り声を上げる一子

その姿に百代は恐怖していた。

「（あの体勢はまるでケモノ、ライオンのスタートダッシュのようだ）」

つまりは前進しかしないという意思表示

一切、退かず、曲がらずの構え

特攻紛いの攻撃にはカウンターの餌食にするのが普通だが、生憎と今回の相手は“普通”ではない

「WAOOOOON!!」

雄叫びと共に爆発的なスピードで突貫してくる一子

「クウ!!」

百代は考えるよりも先に、持ち前の反射神経……むしろ勘と言っても良いほどの反応でギリギリ回避する。

「なっ!?!」

回避して百代が一子の方を振り向くと信じられないようなものを見たような顔で驚いた。

それもそのはず、一子を通った道は深さが2メートル以上も抉れており、破片も塵となっている。

壁の代わりに師範代とその候補生達が張った、結界すらも一撃で破ったのだ。

一子が居るであろう場所は土煙で見えないが、そこから禍々しい気が漂っている

今の攻撃は自分や鉄心が使う川神流の奥義にも匹敵する“ただの”

## 突進攻撃

百代の全身からは滝のような汗が流れ始めた。

「一子、なんでそんなケモノの力を手に入れてしまったんだ」

百代は悲しそうにそう言って構える

「ふふふ、この期に及んでまだそんなこと言ってるの？」

煙が晴れて一子の姿が現れる

その全身からは禍々しく獰猛な気を放ち、纏っている。

「もう一度聞くがお前は本人に一子なのか？」

「だからそうだって言って……あつ“この私”は初めましてか。でも安心して、私は本物の貴女の義妹である川神一子よ、お姉様？」

一子は妖艶にそれでいて獰猛な猛禽類のような笑顔を見せる

「それと勘違いしてることがあるわ、私はケモノなんかじゃない

「

雑刀を横に水平に構える一子

「ケダモノ  
獣よ」

ドガンッ！

激しい轟音と共に一子の薙刀の刃の部分が五倍以上に膨れ上がる

気による身体強化に全力を注いでいた一子のもう一つの気の使い方

「武器に自分の気を通して武器の威力増加と攻撃範囲の拡大が行えるのよ」

これは釈迦堂にも桐生にも出来ない技

いや、正確には出来るかもしれないが自分と同じかそれ以上の練度は出来ていないと一子は自負している。

一子の知る限りで、自分以上の密度で出来るとしたら剣聖・黛大成ぐらいしかいない。

流石に一子もあそこまで武器の“呼吸”を聴き取れない。

長年、同じ武器を使っていると自然とその武器がしている波長

これを一子は“呼吸”と呼んでいる　　を感じ取れる。

一流の剣士が岩や鉄を斬る時にはその物体の呼吸に合わせて斬る

それと同様に一子も武器の呼吸に合わせて気を送り、普通に送るよりも低燃費かつ効率的に送っているつもりだ。

「ま、これは私じゃなくて“一子”の方の考えなんですけどもね。

試しにやってみただけ……なかなか使い勝手がよさそうね」

圧倒的不利の中、今ここに“武神”川神百代の力が試される時が来

たのだった。

s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

一子の試練、百代の試練（後書き）

一子……ごめんね、最初は君をそんな子にするつもりはなかったんだ（笑）

これって実はかなり一子ファンを怒らせてる作品じゃないのかとビクビクしております。

あ、どうでもいい？

じゃあ、今回はこちらへんで

感想をお待ちしておりますw

師範代試験（後編）（前書き）

お久しぶりです、一ヶ月も更新をせずに申し訳ありませんでした

## 師範代試験〜後編〜

語りside

それは凄まじいの一言に限った

一子の一振りで衝撃波が生まれ、半円状に地面が削れる

対する百代はそれを避け、あるいは気で防御して隙あらば反撃をする  
試合場の結界を維持する者たちの限界も近かったのだった。

Side out

百代side

「くっ、まずいな」

徐々にだがワン子の攻撃を避けきれなくなってきたおり、傷が増え  
てきた

体力的にも厳しい、いざという時の瞬間回復が使えないのも痛い

「そろそろそろ、遅くなってきたわよ!!」

しかし私のそんな事情はお構い無しにワン子は猛攻を仕掛けてくる

「もしかしてそろそろ体力が限界に近いのかしら？ 瞬間回復に頼  
って修行をサボっていたせいよ!!」

瞬間回復に頼っていたのは間違いないが修行はちゃんとやっていたさ。

私だって武人の端くれ、積み重ねをしていなかった訳じゃない

お前ほど苦しいことはしてないが、私も苦しい思いをした

だけでも瞬間回復のせいで痛みと疲労と傷が瞬時に回復するんだ

依存していたことに変わりはないか

しばらく忘れてたいたな、こうして痛みを抱えながらの戦闘は

「せいやあああああああああああー!!」

不覚ながらもそんな風なことを考えていたらワン子が先程よりも懐に入ってきていた。

「しまった!!」

武人としてあるまじき行い

なんとか私は右腕で防いだが

「っ!?!」

防ぐも力技で強引に吹き飛ばされながら、私は違和感を覚えた。

衝撃が……七回だと?

完全に防いだ右腕がやられてしまい、ブランブランになる。

「さあさああ、私はあの子と違って容赦しないし、迅いわよ!!」  
くっ、やばいぞ。

瞬間回復が使えない今、この局難を乗りきる方法を導き出すんだ。

まるで蛇のような動きで、太刀筋の軌道を予測させず、知覚できるギリギリの速度での攻撃、雨のような剛激の数々

ああ、いつ以来だろうか、このような危地に立たされたのは

ああ、いつ以来だおうか、このような痛みを抱かえながら戦うのは

ああ、いつ以来だろうか、このように心躍るのは

足を止める

その瞬間に数十と言う衝撃が私を襲う

痛いな、膝が笑って、意識も朦朧として、倒れてしまいそうだ。

「とどめよ!!」

首目掛けて迫ってくる薙刀

間違はなくこれを食らったら負ける

負ける？

誰が？

この私が？

「ふざけるなああああああああ！！」

この時、雄叫びと共に私の中で何が周りだしたのだった

Side out

一子side

勝った

そう思いながら私は薙刀を振るう

その薙刀は吸い込まれるように川神百代の首に向かい、激突まで皮一枚のところまで

「ふざけるなああああああああ！！」

ドゴンッ！！

突然、私を謎の衝撃が襲ってきた

衝撃によって私は吹き飛ばされたので、空中で態勢を立て直す

そして川神百代の方を見てなにが起きたか理解すると私は驚きのあ

まり眩いてしまった

「……嘘でしょう」

川神百代の全身から放出される大量の“気”

その気によって私が傷つけた傷は瞬時に回復していく

「はあはあはあ、どうだ？　ここからが本番だぞ、ワン子！！」

私が封じはずの瞬間回復を使い、傷と疲労

さらには気の巡りまでもが元に戻っている

いったいどうして……まさか

「私が狂うわせた気の巡りを自身が持つ異常なまでの大量の気を使い無理矢理、正常に戻したとでもいうの？」

しっくりくる仮説はこれぐらいしかない

でもそもそも私は川神百代の気の巡りを狂わせた

だからそう簡単にはあんな大量の気を瞬時に出すなんて不可能なはず

もしや今まで手を抜いていた？

いや、それはありえないか

ではそれほどまでに川神百代は気の運用や扱いに長けていたのか？

じっくりくる仮説はこれぐらいしかない

でもそもそも私は川神百代の気の巡りを狂わせた

だからそう簡単にはあんな大量の気を瞬時に出すなんて不可能なはず  
もしまあ今まで手を抜いていた？

いや、それはありえないか

ではそれほどまでに川神百代は気の運用や扱いに長けていたのか？

だがそれならばもっと効率良く気による攻撃や身体強化をしている  
はず

どれも憶測の域を出ないわ

分かるのは川神百代が最高の武人であり、最悪の化け物であるとい  
うこと

ああ、まったく本当に楽しいわね

計り知れない強敵、限界の先にある限界まで迫っていく己

共に極限まで高めあっていくこの高揚感

たまらないわ

世界は今、輝いている！！

「でもそれだけに残念だわね、どうやら“私”が限界みたい」

最後の最後でとびっきりのイレギュラーはあったけど舞台は整えてあげたわよ？

さあ、私という脇役は舞台から降りましようか

ここからはフィナーレへと入っていく

舞台上で演じるは一匹の獣と一人の武人

最高の舞台をお楽しみくださいな

そうして私はあの子……川神一子の中へと消えていった

S i d e o u t

師範代試験〜後編〜（後書き）

次話が二話ぐらいしたら決戦が終わりです

その後は誰かのルートかリユウゼツラン、もしくは今回みたいにオ  
リジナルかもしれません

とにかく感想をお待ちしておりますねWWW

師範代試験〱終幕〱（前書き）

どうも、お久しぶりです。

色々と言いたいことはありますが、それは後書きで……

では、本編にどうぞ！！

## 師範代試験〜終幕〜

一子side

ありがとう

私はもう一人の私に向かって心の中でそう呟く

こんなにお膳立てされたのだ

負けるわけには行かないわね

「と言ってもねえ……」

実際は立ってるのもやっとなぐらいだし

長期戦は無理ね

やるならば短期決戦でしかも確実に一回の攻撃で仕留めなければ勝ち目はない

「ワン子……いや、川神一子」

構えたまま私に話しかけてくる川神百代

「よくぞここまで戦い抜いた。私もここまでの苦戦は久しぶりだ」

また強者の驕りかしら？

とは言えない

この状況、間違いなくこちらが圧倒的に優勢なのだ

「もう立っているのも辛かろう、だから私も一人の武人として全力の一撃で葬ってやろう」

腰を落として拳に気を溜める川神百代

マズイ

川神百代は瞬間回復で疲労と傷を回復している

気も早期に私が瞬間回復を封じていたからいつもより消費していない

それにあそこまで気を溜めて放たれる一撃　恐らくは富士砕き  
であろう　直撃を加えられたら、まず間違いなく川神鉄心であ  
ろうとも一撃で敗北するであろう

だがこれは私にとっても好機である

まさに背水の陣

避ける体力も防ぐ力もない

ならば迎え討つのみ！！

「眠ったばかりで悪いけど貴方の力、もう少しだけ借りるわよ」

私とあの子は二心一体

故に私一人では不可能でも二人ならば可能なこともある！！

「ハアアアアア」

意識を集中させる

まだ一度も成功させていない超超超神速

全ての物理法則を無視するあの技は使用不可能

だがあれしか方法が思い付かない

「この窮地で、ぶつつけ本番……最高の舞台じゃない」

今まで積み重ねてきた総てをこの一瞬に賭ける

なんて素晴らしいことだろうか

光灯る街に背を向け、我が歩は果てなき荒野

奇跡も無く、標も無く、ただ夜が広がるのみ

揺るぎない意志を糧として、闇の旅を進んでいく

そう、私はいつもそうしてきた

標も無く、奇跡を求めず



「亜流川神流最終奥義！ 獣王ノ顎おおおおおおお！！」上  
下斜め左右から三対の超超超神速の斬撃

それは気を最大限に溜め、川神鉄心の毘沙門天とほぼ同格のスピードで迫る富士砕きを遙かに凌ぐ刹那の速度の攻撃であった

すれ違う二人

そして勝敗は直ぐに判明した

「……残念だったな、ワン子」

そう呟いたのは百代

「今の一撃……いや、九撃で私の攻撃を弾き、気を封じたが私の攻撃を全て無効化するのは無理だったようだな」

「ガハツ！！」

一子の服の腹の部分が丸く弾け、一子は吐血した

川神百代の攻撃は確かに弾かれた

だがそれは肉弾での攻撃だけ

拳が弾かれる一瞬前に偶然ではあるが気を放った

威力は激減してしまったが今の一子ならば十分に気絶させる威力である

崩れ落ちていく一子

しかし

「ふふふ、ええそうね……“お互いに”詰めが甘かったわね」

してやったりという顔の一子

そして

「ああ……その通りだな」

うつすらと百代の身体に傷が浮かび上がり

「……………見事だった」

百代の服が裂け、血が噴水のように吹き出した

同時に倒れる二人

両者ともに意識はなかった

「それまで！ この勝負引き分け！！」

審判のルー師範代の声が響く

そして、短くも長きにわたる戦いは幕を閉じたのであった。

師範代試験〈終幕〉（後書き）

どうでしたでしょうか？

色々と自分にも思うところがありまして、このような決着の仕方  
終わらせました。

そりゃあ、皆さんの期待に乗れていないかもしれませんがご容赦  
くださいませ。

最近、メイプルストーリーにハマってまして更新が遅れたことも申  
し訳ありませんでした。

その点を含めて、これからはもっと更新期間を短くしていきたいと  
思っております。

では、感想をお待ちしておりますね。

## エピソード的なお話（前書き）

どうも、すごくお久しぶりです。

遅れた理由としてはS発売までに揚羽 を書くかどうかが迷っており  
ました。

アンケートを取るうにもこれがサブタイで予想できる通り、ワン子  
ルート最終回

とりあえず、本編をお楽しみくださいませ

## エピソード的なお話

一子side

「ん……ここは？」

目を覚ますと知らない夜天が広がっていた

「目覚めたか」

優しくて、心地よい声

「桐生さん？」

「おう、桐生だぞ」

そっと頭を撫でてくる桐生さん

見れば、どうやら私は桐生さんに膝枕されてたみたいだ

「……ここは？」

「川原」

ああ、川原ね

「って！ 勝負は！？」

そうだ、結果は一体どうなったの

慌てて身体を起こすと身体中に激痛が走った

「ギヤアアアア！」

痛い痛い痛い！？

洒落にならない痛さよ！

「ははは、あんな技を放った後だ。身体が悲鳴をあげるのは当然だろっ」

うっ、それもそうよね

「ねえねえ、桐生さん」

「なんだよ？」

「勝負の結果は……どうなったの？」

不安そうな顔で聞いてくる一子

「結論から言うと、お前は百代には勝てなかったよ」

「そんな……」

顔を暗くしてもう一度、俺の膝の上に頭を乗っけてくる

腕で目の辺りを抑える一子

「勝てなかったんだ……悔しいなあ」

必死に涙を堪えながらだから声が震えている。

どうしようか、師範代にはなれたよって気軽に言えない雰囲気だ

言う順番を間違えたか？

「悔しいよお、桐生さん。私、師範代になれなかった……あんだけ頑張ったのに、お姉さまを超えるって宣言したのに！！」

「あ、あのですね、一子さん」

思わず喋り方が丁寧になってしまう

「百代との戦いは勝てなかったけど、それは負けじゃなくて引き分けでして、もっと端的に言わせていただくと師範代試験には合格したんです」

そう俺が言うと先程まで泣いていた声がピタリとやんだ。

おお、泣きやんだぞ！

「……か……」

ん、どうしたんだ？

「……の……か……」

聞こえないので耳を近づけてみる

「桐生さんのバカーーーーーーッ！  
！」

耳がああああああああああ！？

あまりの声の大きさと耳を噛まれた痛みでのたうちまわる俺

「さっきまで泣いてた自分が恥ずかしいじゃないのよ！！」

「ごめんなさああい！！」

満点の星空の下で、俺たちはいつも通り笑いあう

そして俺は思った『一子と付き合ってるって、揚羽になんて言おうか？』

後日、それを告げた時に一子が揚羽と百代と闘った時並みに凄まじい戦いを繰り広げたのは別のお話。

俺は思う、この刺激的で、未知に溢れていて、辛くも楽しい日常がいつまでも続きますようにと。

「さあ、新しい物語を始めよう」

でもそれは、また今度……かもしれないな。

## エピソード的なお話（後書き）

本編をお楽しみくださいって言ったのにこの短さorz

本当に申し訳ないことばかりです。

一応、この次は揚羽さん を書くつもりなのですが

こんな中途半端な終わり方で、皆様は嫌なんじゃないかなと思う  
てたりもしています。

とりあえずは、Sが発売までに揚羽 書くか

もう一つの作品の続きを書くか迷っています。

まあ、ご意見などがありましたらよろしくです。

『最強の女と最凶の漢 ver. ワン子』今までお楽しみいただき  
ましてありがとうございます。

次はver揚羽でお会いしましょう。

ではサラダバツ!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0562q/>

---

最強の女と最凶の漢

2011年9月28日01時43分発行